

**Re:ゼロから始める
前日譚
氷結の絆**

長月達平

MF文庫 

畏怖——審判を自任し、世界の均衡を保つために振る舞う『調停者』メラクエラ。
 脅威——己が寢床で悠久の安寧を貪る、最も美しき殺戮者『通り魔』ザーレスティア。
 崇敬——意思も言葉も理念も持たず、存在するだけの神域『石塊』ムスベル。
 祝福——霊峰の頂より、人々を慈愛と博愛で見守り続ける『霊獣』オドグラス。

世界中に満ちるマナ。そのマナの源であり、常世の根源とされるオド・ラグナ。精霊とはオド・ラグナより命を分け与えられ、マナの力で現世に実体化し、己の意思を以て世界に干渉する超自然的な存在の総称とされる。彼らは微精霊として生まれ、準精霊の格を経て、精霊という存在の高みに至る。特に強い力を持つ精霊は大精霊とされるが、その中でも最も強力な四体の精霊は四大精霊と呼ばれ、あらゆる人々に畏怖、崇敬、祝福、脅威を振りまいていた。

——精霊と呼ばれる存在がある。

プロローグ 「四大と異物」

Re: Life in a different world from zero

"The only ability I got in a different world "Returns by Death"
I die again and again to save her.

CONTENTS

プロローグ	『四大と異物』	003
第一章	『君に呼ばれて』	005
第二章	『ボクはここにいる』	037
第三章	『君のためになら』	124
第四章	『なんにだってなれるよ』	186
エピローグ	『幸せの意味』	263

いずれ劣らぬ強大な力を持った四体の大精霊、すなわち四大精霊。その存在と名前は広く知れ渡っており、四大との付き合い方は世界中の国々で非常に重要な難題として語り継がれてきた。

事実、四大の怒りに触れたことで滅んだ都市も歴史上には存在する。四大は『霊獣』を除けば人類に友好的とはいえず、その行動も大部分が独善的だ。

特に前述の都市が減んだ経緯——それは『調停者』と、四大に匹敵する力を持った大精霊との衝突が遠因となったとも伝わっている。

四大に匹敵する力を持った大精霊、その名前と姿形は知られていない。

ただ名前だけが独り歩きしており、人々は『調停者』の審判を免れ、生き延びた大精霊のことをこう呼んで恐れている。

——四大に匹敵する凶獣、『終焉の獣』と。

その実態と所在は、今もお誰も知らないままに——。

第一章 『君に呼ばれて』

1

——目覚めたとき、最初に感じたのは寒気だった。

「……すごく、さむい」

粗末な寝台の上で体を起こして、銀色の少女は弱々しく呟いた。

——尋常でなく、整った外見をした少女だった。

月光を透かしたような銀色の髪に、降り積もる処女雪と見紛う白い肌。細められた瞼の奥にある紫紺の瞳は眩い宝石そのもので、奇跡的な美貌がそこに成立している。

ただし、その横顔は眠たげで、少女が寝台から動き出す気配は全くない。

そのまま延々と、ベッドでシートにくるまったまま時間が経過する。

部屋の外から流れ込むのは、冴え冴えとした涼やかな空気が。早朝を思わせる雰囲気の

中で、少女は夢現のまま時間を浪費し続ける。
朝であることを加味しても、寝惚けすぎを心配されるほどに。

「起きなきゃ……」

小一時間ほども過ぎたところで、ようやく少女の意識が起動する。

「ふあ」と欠伸しながら、少女は長い足をベッドから降りして床に立つ。寝巻きにしている白い薄布が肩からずり落ち、細く滑らかな肌が大胆に露わになった。

美貌の少女のあられもない姿は、煽情的というより芸術的ですからあった。あるいは至高の絵画の一枚を思わせる立ち姿だが、人目がないにしても無防備にすぎる。

それはまるで、自分が他者にどう見えるのか考えたこともないような態度だ。

「――」

寝癖のついた長い銀髪を撫でながら、少女はゆっくり扉を開け、家を出た。

大樹の幹をくり抜き、窓と扉を取り付けた形の自然を利用した住居だ。頭上、木々の隙間から差し込む木漏れ日に目を細め、少女は木の扉をお尻で閉める。

うねる根の階段を降りれば、裸足の少女を霜に包まれた大地が迎える。その冷たさに小さく唸り、少女は薄氷を踏むような感触を味わいながら、小川に向かった。

家のすぐ脇にある小川は、少女の生活に欠かせない自然の恵みだ。膝を折って小川に顔を近づけ、少女は冷たい水をすくって顔を洗った。

「ん！ んー！ んんんーっ」

文字通り、目の覚める水の冷たさに眠気を吹き飛ばし、少女は白い頬を両手で叩く。

「んー！ よし！」

長く戦った眠気とも、冷たい水のおかげでようやくおさらばだ。

声に気力を漲らせ、少女はぺちぺちと頬を叩いて立ち上がる。頭を振って濡れた前髪を払うと、彼女は早々に小川から引き上げた。

「さ、みんなのお世話にいかなくっちゃ」

小川の傍ら、そこに洗濯物を干すための広場がある。細い木の間に紐を通しただけの物干し場、少女はそこから一枚の手拭いを回収し、勢いよく走り出した。

草を踏み、根を飛び越え、衣の裾を翻して、少女は木々の群れ――森の中を飛ぶように駆ける。景色は白く、風は冷たい。だが、少女にとっては慣れ親しんだ風景だ。

片手で枝を掴み、振り子の要領で体を前に飛ばす。道のりを大きく短縮して、寝起きの悪さを取り戻す勢いで目的地に到着した。

「よ、っこいしょ！ とと、おはようございまーす！」

着地の瞬間、勢いがつきすぎていたのをつんのめって耐える。そのバツの悪さを隠すように舌を出し、少女はすぐ目の前にある人影に照れ笑いしながら挨拶した。

ただし、微笑みかける少女に相手からの返事はない。

当然だ。それは人の形をしているが、人ではない物体——氷像であるのだから。精緻な造りとした氷像は三体、森の一角に背中合わせて並んでいる。答えのない氷像に笑いかけ、手拭いを持ち上げ、

「それじゃ、今日もちよっとだけごめんさい。我慢してね」

一声、お詫びの声をかけてから少女の日課が始まる。

手拭いで氷像の頭や肩を払い、積もった霜を落としてやる。力を入れすぎないように、少女の手つきは慎重で細やかだ。やがて十分ほどで氷像から綺麗に霜が取り除かれる。

その仕事ぶりに満足げに頷いて、少女はその場で軽く背伸びした。

「今日は寝坊しちゃったから、ちよっと急がなきゃいけないかも」

空を見上げ、日課の出足が遅れたことを反省する。日課である氷像の手入れ、それはこの場だけの仕事ではない。森中、同じ氷像はあちこちに点在している。

その全ての手入れが少女の日課だ。普段より太陽の位置が高く、挽回するには気合を入れる必要があるぞ、と少女は気持ちを入れ直す。

と、そんな風に少女が意気込んだところ、

「——やれやれ。毎日、よくよく精が出るもんだね」

ふいに空から声かけられて、出鼻を挫かれた少女が眉を顰めて頭上を睨む。

「……またそうやって、すごく嫌な言い方するんだから」

「だって不思議なんだよ。誰も褒めてくれないのに、空しくならないのかなって」

「別に誰かに褒められたくてやってるわけじゃないもん。変なこと言わないで」

少女と言い合う声は中性的で、男とも女ともつかないものだ。頭上を見渡しても相手の姿が見当たらず、少女はますます不満げに頬を膨らませた。

「挨拶もなしで、顔も見せてくれないの？ それってすごく失礼よ」

「んー、それはそうだね。ちよっと待ってて」

つんと唇を尖らせた少女の物言いに、ふと冷たい風が森の中を吹き抜けていく。

それは淡く、緑の燐光を纏った風だ。風は少女の眼前で渦を巻き、やがてゆつくりと小さな輪郭を結び始める。そして瞬きの直後、光は実体を伴って顕現した。

ふわふわとした灰色の毛並みに、人の掌に乗るほど小さな体。左右に揺れる尻尾は体長に匹敵するほど長く、円らな黒い瞳が少女を間近で見つめている。

それは子猫、に酷似した存在だ。

しかし、姿形こそ猫に似ているが、その本質は大きく異なる。正確には子猫どころか、本来は自然界に存在するはずのない超常の存在だ。

それは常外の存在、自然界の枠組みの外にある超越的な力を持った命——。

「——精霊さん」

少女の呼び方に小猫が顔をくしゃくしゃにする。人間めいた仕草、それは笑顔だ。「それはボクのことと合ってるけど、ボクと君との間に限れば間違った呼び方だよ」精霊、そう呼ばれたことに小猫は不満げだ。小猫は少女の顔の前で、当たり前のように宙に浮かびながら、その短い手で顔を洗っている。その態度に少女は小さく息を漏らし、その唇を震わせる。

「——パック」

「うん。よくできました。そう呼んでくれて嬉しいよ、エミリア」

パックと呼ばれた精霊は、エミリアと呼んだ少女に今度こそ満面の笑顔を向けた。その笑顔がやけに親愛に満ちていて、変な猫だと少女は思う。

白く、冷たい風と雪に覆われた広大な森で、不思議な一人と一匹は言葉を交わす。それは全てが凍てつく森で交わされる、二人きりのささやかな交流だった。

2

——森で暮らすエミリアにとつて、精霊のパックとは奇妙な隣人のような間柄だ。家族というほど一緒にいない。友人というほど気安くない。知人というほど遠くない。

だから、隣人と呼ぶべき関係——エミリアは、なんとなくそう思っている。

「ホント、パックつてすごーく暇なのね。いつつ、私が忙しいときばかりちよっかいかけて邪魔するんだから」

「えー、そんなことないよ。むしろ、君がいつも忙しくしてるのが悪いんじゃないかな」

「私はやることいっぱいあるの！ パックと遊んでる暇なんてありません」

「朝、起きてすぐとうとうとしてる時間はあるのに？」

「へ、変なこと言わないで。私はいつも早起きだもん。ホント、ホントよ？」

頬を赤らめ、早口で言い訳するエミリアにパックは呑気な顔で髭を弾いている。

「ずんずんと森を進むエミリアの後ろに、パックが浮かびながらついてくる形だ。日課を続けるエミリアの頭上で、パックはくるくると旋回しながら誘惑する。

「ボクが暇猫なのは否定しないけど、エミリアは無駄に頑張りすぎだよ。もっとゆとりを持って、自堕落に過ごしてもバチは当たらないと思うな」

「ジダラクって、なんだかその響きがすごーく嫌」

「自堕落が嫌なら、怠惰を貪るとか？ あ、でもその単語はボクが嫌、なんとなく」

自分で何事か結論するパックに、エミリアは深く嘆息する。

「私が忙しくしてるのが嫌なら、パックも手伝ってくれるの？」

「手伝うって何をー？」

「みんなのお世話と森の調査！ 決まってるじゃない」

わざとらしく首をひねるバックに、エミリアは足を止めて指を突き付けた。そのまま突き付けた指で、ぐるりと周囲の森を指し示す。

「バックが手伝ってくれるなら、私ももつと時間ができて……」

「それは嫌だよ。ボク、精霊最大のメリットは働かなくていいことだと思ってるから。おまけに仕事の内容が無駄だなんて、なおさら心が動かないよ」

「……なんで、そんなイジワルなことばっかり言うの。バックのアンポンタン」

小猫の辛辣な言葉に、エミリアは傷付いた顔になる。自分の日課を『無駄な労働』と言われてはエミリアも面白くない。

「それはボクから君への意趣返しだよ。なかなかエミリアはボクの言うことを聞いてくれないからね。君が意地っ張りをやめたら、ボクも優しくなれるんだけど」

「じゃあ、結構です！ お引き取りください！ ふんだ」

ウインクする小猫に、エミリアは顔を背けて交渉決裂を宣言した。

無駄、無意味と言われても日課をやめるつもりはない。むしろ早足になるエミリアの後ろに続きながら、バックは肩をすくめて苦笑した。

「こゝまでは頻繁に繰り返される、日課のようなやり取りだ。そして、すげなくされたバックは引き上げ、ほとぼりが冷めた午後にもた顔を出す流れになるのだが――、

「――エミリア」

「なあに？ 言っておくけど、まだ私は怒ってます。バックの話になんてちよつとしか付き合っただげないんだから。でも、謝ってくれるんなら……」

「じゃ、残念だけどそのちよつとは次の機会だね。――お客さんだよ」

わずかに声を低くしたバックの報告に、エミリアの表情がそれまでと一変する。

整った横顔に緊張を浮かべ、エミリアは懐から紙の巻物を取り出した。その間、バックは首を巡らせ、森の冷たい風に小鼻をすんすんと鳴らす。

そして、バックはエミリアの広げた巻物――森の地図を見下ろして、

「人間、数は結構多いかも」

「場所はわかる？」

「ここから北、地図の『うっかり雪道』の辺り……ねえ、やっぱり地名は付け直した方がいい気がしない？」

「どうして？ 見返すにもわかりやすくして、いい名前だと思うけど……」

「それは同感だけど、人に見られたとき恥ずかしいかなって……ああ、もういいや」

提案に首を傾げると、何故かバックは問題を放り投げてしまった。その態度に腑に落ちないものを感じながら、エミリアはなんとかその感慨を後回しにした。

――『うっかり雪道』はその名前に反して、とても厄介な場所なのだから。

「注意書きの看板、いくつもあるのに森に入る輩は尽きないね」

「たまたま見落としただけかもしれないじゃない」

「それはそれで自業自得だよ。自己責任なんだから放っておいたら？」

「そう無理やり命令しないのは、バックのちよつとだけいいところよね」

笑いかけ、エミリアは手拭いで自分の銀髪を手早くまとめる。その髪を括ったエミリアに、バックがどこからか取り出した純白のローブを被る。これで誰にも正体はわからないはずだ。

受け取り、袖を通してフードを被る。これで誰にも正体はわからないはずだ。

「それにしても、だぶだぶすぎない？」

「その方が可愛いよ」

「そんなお話しでないでしょ」

だぶつく袖を軽くまくって、エミリアはバックを睨んでから一気に走り出した。

日課のために『庭』——そう称した森を巡るときと違い、雪を蹴る足取りは軽快に加速する。目的地まで最短距離を最速で突っ切る、そのための走りだ。

低い姿勢で凍った木立を駆け抜ける。凍てつく木の枝葉は刃のように鋭いが、エミリアはその隙間を縫うように走り続けた。

「近くなって臭いが濃くなってきた。数は……少ないな。十人くらいだね」

尾をなびかせながら空を飛び、バックはエミリアの疾走に難なくついてくる。その報告

に顎を引いて、雪上を駆けるエミリアは視線を鋭くした。

「こんな雪の森なのに地竜は連れてない。ま、当然かな」

「地竜がいたら、こんな危ないところまで入り込んできたりしないもんね」

「竜は危険に鼻が利くからね。お馬鹿さんたちの自殺に付き合ったりしないよ」

バックの皮肉に頷いて、エミリアは大きな窪地を軽々と飛び越える。

すでに『庭』からは大きく外れているが、この辺りは地図も作成済みの道のりだ。常人には同じに見える景色も、エミリアには違いが手に取るようにわかる。

悪路を駆け抜け、飛び越え、踏みつけにして突破、やがて——、

「——出た！」

ふいに森の視界が開け、エミリアの正面に『うっかり雪道』が現れる。

それは森と森との隙間、左右を木々に挟まれる雪の坂道だ。道幅は大の大人が腕を広げて三人並べるほど広く、森の中で不自然に整った道途である。

そして、その雪道に轍を付け、懸命に荷車を押している人影を発見した。額に汗する十人ほどの男たちは、この雪の坂道の上まで荷車を運ぼうと必死になっている。

それだけ一所懸命な姿を見れば、あるいは同情心も湧きそうなものだが——、

「それも、せいぜい迷子の場合だけだね」

「……道に迷った可能性も、ないわけじゃないわ」

「地竜も連れずに、人目を忍ぶような森の細道に入り込んでおいて？ 君の言ってる迷子って、人生って道に迷ったって意味？」

「……パツクのオタンコナス」

小猫の皮肉に弱々しく言い返し、エミリアは『うっかり雪道』を見下ろす。

雪道を挟む大樹の一本、その太い枝の上からエミリアは集団を油断なく観察した。

男たちは防寒具を着込み、荷車の車輪には滑り止めの鎖が巻かれている。寒冷地では欠かせない工夫だが、今の季節は氷季とは程遠く、雪が降るほど寒いのはこの森だけと断言できる。つまり、彼らは元々、この森を抜ける準備をしてきたわけ——。

「素直にボクの言うこと、認める気になった？」

「もう、うるさい」

「んにゃー」

耳元で囁くパツクを指で押し返し、エミリアは枝の上で立ち上がる。それから最後に、押された額を撫でている小猫を強く睨んだ。

「私がいつてくるから、パツクは黙って見てること。邪魔しちやダメだからね」

「邪魔って例えばどんなこと？」

「こんな風にいつまでも引き止めたりしないこと」

「にやるほど」

そう納得顔のパツクに目もくれず、エミリアは枝から雪道に飛び降りた。

落下中にフードを被り直し、顔を見られないように注意する。そして、わざと音を立てて雪に着地すると、その音に気付いた集団が驚いて振り返った。

「——う、お!?!」「な、なんだなんだ！ 急に何がきやがった……!?!」

声を上げる男たちは、雪の上に乗ってきたエミリアの姿に揃って警戒を向ける。

厚手の毛皮を着こみ、動物の毛をあしらった帽子を被った一団だ。動揺している彼らに、エミリアはまず初めに掌を向け、第一声を放つ。

「——そこまでよ」

響いたのは、硬く凛々しい銀鈴の声音だ。

男たちを落ち着かせるための発言、それに彼らは魅入られたように動きを止めた。

それはエミリアの声音に囚われた結果だが、エミリア自身はその影響に気付かず、フードの中で頬を強張らせながら彼らの前に立ちはだかる。

「ここから先は危険な道よ。ケガしたくないなら大人しく家に帰って」

エミリアの発言に目を丸くして、男たちは呆気に取られて立ち尽くす。その反応にエミリアは好感触を覚えて、説得がうまくいきそうだと内心で頷いた。

背後の木立では、今もパツクがエミリアの説得を期待薄とばかりに眺めているはずだ。その思い違いを訂正して、小猫の鼻を明かしてやろう。

「森の入口と分かれ道、他にもたくさん立ち入り禁止の看板があったはずよ。全部見落としちゃったなら……ええと、言いくいだけけど、あなたたちは森とか山に入るのに向いてないと思うの。すこしく危ないわ」

「今日のことは反省して、ここは大人しく引き返して。もしも道が不安なら、私が案内してあげるから。それで、どう？」

小首を傾げて問いかけると、男たちは無言で顔を見合わせた。思案する彼らの態度に、エミリアはかなり理路整然とした説得ができたと自賛する。

バックもさぞ驚いているはずだ。これで男たちも反省してくれば万々歳である。

「あー、お姉ちゃんよ」

「なあに？」

平謝りするバックを想像するエミリアに、大柄で髭面の男が声をかける。どうやら集団のまとめ役らしい男は、エミリアの注意に反省して頭を下げて――、

「――そんな話に、『はい、わかりました』なんてなるわけねえだろ」

くれるはずもなく、手にした弩弓をエミリアに向け、そう吐き捨てた。

――木立から、バックの呆れた嘆息が聞こえた気がした。

3

髭面の弩弓にはすでに矢が番えられ、いつでも射撃できる状態にあった。

弩弓とは台座に矢を固定し、機械仕掛けで弦を巻いて矢を放つ狩猟用の武器だ。

元は北方のグステコ聖王国で発明された武器で、女子供にも扱うことが可能な上、男性であれば片手で扱える取り回しの良さから重宝されている。

当然、命中率は射手の腕に依存するが、髭面はかなり扱い慣れた手つきだった。

「おっと、妙なことは考えんなよ。お姉ちゃんの手足ぐらい簡単に吹っ飛ばぞ」

「……それ、護身用の道具？」

「護身用にしちゃ威力が強すぎる。ご覧の通り、邪魔者を始末する得物だよ。お前みたいに余計なことに首を突っ込む奴のための、な。――おい！」

嘲るように言って、髭面が仲間を顎をしゃくくる。それを受け、荷車を押す中の一人がロープを手にエミリアへにじり寄ってきた。

「悪いが、見られたからにはすんなり帰すわけにはいかねえ。姉ちゃんは何も見なかった……ってより、ここに女なんていなかったって方が丸く収まるんでな」

「見られて困るってことは、この森で悪いことしようとしてたってこと？」

「後ろ暗いことがなきや、誰が好き好んでこんなとこくるかよ。そりゃ俺たちだけの話じゃない。お姉ちゃんにも、思い当たる節はあるんだろ？」
 下卑た敵意を隠さず、髭面は齒の欠けた顔で下品に笑った。その男の言い掛かりのような物言いに、しかしエミリアは顔をしかめて黙り込む。

適当で暴力的な髭面の推測——それが、完全に的外れだとは言えなかったからだ。

「——！ 待て、勝手に動くな！」

首を振り、エミリアは髭面に向かって足を進める。その動きに髭面は弩弓を揺すって牽制するが、エミリアは取り合わない。

「あなたたちのすごく勝手な言い分はわかりました。だから、私も私のわがままであなたたちを振り回すことにするわ。恨みつこなしだから」

「馬鹿が！ この弓が見えねえのか？」

「あなたこそ、ちゃんとよく見て狙わないと当てられないかもしれないわよ？」

「——死ね！」

挑発に青筋を浮かべ、髭面がエミリアに向けた弩弓の引き金を引いた。

発射機構に巻かれた弦が弾かれ、冷たい空気を切り裂く矢が放たれる。エミリアへの距離は十メートルもなく、狙いは真っ直ぐ少女の体のど真ん中だ。

いい腕で、躊躇いもない。人だろうと獣だろうと、一撃で仕留める技量と気迫だ。

——だからこそ、狙いを先読みすることは容易い。

「な、あ!？」

「恨みつこ、なしだから」

弩弓の矢が穿ったのは、身躲したエミリアの背後にあつた大樹の幹だ。必殺の一撃を避けられて動揺する髭面に、エミリアは先ほどの宣告を繰り返して聞かせる。

挑発で急所を狙わせ、殺気の爆発に合わせて射撃の間を見切った。狙いと機が読めれば、矢を躲すのは簡単だ。初撃を避け、そのまま反撃に移る。

「し——っ！」

ローブの裾を翻して、エミリアは最寄りの男に飛びかかった。

髭面の先制を疑っていなかった男は、そのエミリアに反応できない。懐に飛び込み、肩で男の顎をかち上げ、その体を乱暴に荷車へ投げつける。並んでいた男たちは仲間の体に薙ぎ倒され、苦鳴を上げて雪の上に転がった。

「ば、馬鹿野郎！ お前ら、何を呆けてやがる！」

出鼻を挫かれる形になった仲間に、我に返った髭面が罵声を浴びせる。その言葉に大慌てで男たちが得物を抜いた。次々に構えられる鈍や手斧を目にして、エミリアは場違いな安堵を得る。飛び道具はない。それだけが不安だった。

飛び道具だけは、同士討ちさせずに済む自信が持てなかったから。

「でも、これで心配はおしまい！」

憂慮を投げ捨て、エミリアは殺到する敵の集団に果敢に飛び込む。

武装する敵に対して、エミリアは徒手空拳だ。敵の攻撃には躊躇いがなく、エミリアは彼らを害する意思がない。おまけに敵は多数、エミリア不利もいところだ。

しかし、そんな不利を全てひっくり返すように、地形がエミリアに味方する。

雪上はエミリアにとって、自宅も同然の環境だ。一方、よたよたと赤子のような足取りの男たちの機動力は致命的に奪われている。優勢は誰の目にも明らかだった。

「えい！ や！ たあ！」

雪を蹴り、軽い踏み込みで正面の男の顎に掌底を打ち込む。すぐ脇の相手に水面蹴りを浴びせて体勢を崩し、その上に別の敵を投げ落としてまとめて轟沈。

その手際、まるで舞を踊るかのようにはしゃやかだ。

「な、なんだってんだ、この女……！」

しかし、仲間を圧倒される髭面に、その舞踊に見惚れる余裕はない。髭面はかじかむ指で必死に弩弓に矢を番えようとするが、焦りもあつてうまくいかない。

取り回しと威力で重宝される弩弓、その最大の欠点は連射が利かないことだ。髭面が二の矢を装填する間に、エミリアは男の仲間を半数まで減らしていた。

「クソ、クソクソクソクソクソ……っ」

背後、弩弓に矢の装填を終えた髭面がエミリアに狙いを定める。その気配を察し、エミリアはあえて大げさな蹴りを放ち、隙を作ることにした。

初撃と同じく、機と狙いを用意する。あとは避けるだけ、そのための誘いだ。

「うー、りゃっ！」

長い足で太った男を蹴り飛ばし、動きの止まるエミリアに射線が開かれる。

次の瞬間、それを好機と見た髭面の殺気が爆発し――、

矢の代わりに放たれたのは、血を吐くような髭面の絶叫だった。

悲鳴にエミリアが驚いて振り返ると、そこでは髭面を真っ赤にした髭面がのた打ち回っていた。その様子に、エミリアは大慌てで彼に駆け寄る。

「もう、言わんこっちゃない！」

傍らに滑り込み、髭面を覗き込んだエミリアが顔をしかめる。

悶える男の顔面、その右側を縦に深々と裂傷が走っていた。側には弦の切れた弩弓、おそらく切れて弾けた弦が男の顔面を引き裂いたのだ。

髭面は右耳を吹っ飛ばされ、おびたらしい血を流して声を上げ続ける。

「痛え痛え痛え痛え！」

「動かないで！ じっとしてなさい！」

暴れる男を押さえ込み、エミリアは髪を括くくつていた手拭てぬぐいいをほどこいて、それで男の顔を傷口きずぐちごときつく縛ゆわった。乱暴な手当てだが、他に手立てがない。止血が済む頃には髭面ひげづらは失神しんしており、両手を血で汚したエミリアは男たちに振り返った。

「……まだ続けるの？」

その言葉に、頭目かぶを倒された上に半数まで減った男たちは息を呑のんだ。彼らも不利しよは承知ちしている。だが、矜持きんぢが簡単に引き下がることを許さないのでろう。

それは無駄な意地だ。エミリアは髭面の血に染まる雪を指差した。

「いい？　ここは元々、獣けものたちの通り道なの。縄張りでうるさくしたし、血も流したから今に大勢で押し寄せてくるわ。——この森が怖い場所って、知ってるんでしょ？」

「——」

「倒れる人たちを連れて、元の道に戻って森から出て。私は何もしないから」

争うつもりはない、とエミリアは再び訴える。その言葉に男たちはしばらく沈黙してしたが、やがて諦あきらめたように倒れる仲間を担かかり始めた。

それでいい、とエミリアは安堵あんぷする。引き上げるなら何もしない。ただし——、

「言いったはずよ、急いいでって。バチが当たったと思って、荷物は諦あきらめて」

男たちの運搬うんぱんしていた荷車、その回収はやめさせる。すでにこの騒さわぎは森中に伝わったはずだ。今は安全のために、一刻も早くここを離れる必要がある。

そのエミリアの指摘しこに、さすがに男たちも反発はんぱつの兆きざしを見せた。が、それもエミリアに睨にらみつけられて霧散きりし、彼らはすぐごと森を退散たいさんしていった。

「——バック、きて」

雪道から男たちが完全にいなくなるのを見届け、エミリアはそう呟つぶやいた。その間、彼女は足下に落ちていた弩弓じきゅうを拾ひろい、切れた弦つるを確認かくにんしている。

動作不良で髭面を傷付けた弩弓——ただし、弦が切れたのは偶発ぐふつ的なものではない。

「見てたよー。いやー、派手にやったもんだね」

そのエミリアの顔の横に、観覧席くわんらんせきからやってきたバックが悠然ゆんぜんと並んだ。小猫は荒らされた雪道と血の跡に目を丸くしているが、その白々しさにエミリアは嘆息たんいきする。

それから、エミリアは手の中の弩弓を彼に向かって掲げてみせた。

「わざとらしいんだから。バック、余計よけいなことしたでしょ」

「余計なことって？　ボク、全然ぜんぜんわかんない。猫だから」

「猫じゃないでしょ。——ほら、この弓矢ゆみや、ここところが凍こってる。これのせいで弦つるが

切れて、あの人が大ケガしたんじゃない。こんなこと普通はできないもん」

「エミリア、そんな痛いたそうなことを……」

「私わたしじゃありません！　まったく、手出ししちやダメって言うておいたのに……」

とほけるバックを叱しかりつけ、弩弓を下ろすエミリアは額かぶに手を当てた。

弩弓への小細工といえれば可愛いが、その結果はあまりに惨い。ただ、バックが何のためにそんなことをしたのか、エミリアだってわかっている。

「助けてくれたのはわかっているし、嬉しいの。でも、バックなら他にやり方が……」
「悪いけど、ボクは彼らが痛い目に遭うのは因果応報だと思うから、配慮なんてしてあげないよ。君の無事の方が、ずっとずっと大事なんだから」

悪びれもせず自分の髭に触るバックの返答にエミリアは目を伏せる。

バックの発言に嘘はない。バックが本心からそう考えて、エミリアを案じてくれているのはわかっている。わかっているから、それがエミリアには辛かった。

この小猫が寄せてくれる親愛、それを受ける資格の在処も、それに報いる方法も、エミリアにはわからずにいるのだから。

「――」

通常、在り方の異なる人と精霊とが共に過ごすことはありえない。その通常の在り方を逸脱し、両者を繋ぐ方法——それは、人と精霊との『契約』だ。

誓いと契りを結ぶことで、精霊は人に力を貸し、使役されるようになる。そうして精霊と契約を交わし、常外の力を得た存在は『精霊使い』と呼ばれている。

その関係であれば、人と精霊とが親しく交わることもおかしくはない。エミリアとバックの関係もその範疇だ。しかし、二人の関係はそうではない。

エミリアとバックの間には何の契約関係もない。エミリアは森で暮らす一人の少女であり、バックは単なる野良精霊——ただそれだけの関係、そのはずだ。

そして、それ以上踏み込む勇気を、エミリアは持っていなかった。

「そんなことよりエミリア、残った荷物の確認をしようよ。あの子たちが何を運んでたにせよ、置きっ放しで魔獣に持ってかれるのももったいないし」

「……だけど、それって泥棒みたいじゃない？」

「廃棄物の有効利用だよ。可愛い服とかあるといいね。望み薄だけど」

呑気なバックの物言いに、エミリアはそれまでの思索を放り捨てて微笑する。

霧囲気を仕切り直してくれているのだ。その気遣いに乗せられることにして、エミリアは雪道に残された荷車に足をかけ、荷台にある木箱の中身を確認した。

「中身は……瓶詰め、なんだろ。ドロドロしてる。お薬かしら」

「緑色で不気味だね。捨てていく？ それとも、ソリ作る？」

「ん、お願い」

一抱えほどもある木箱にぎっしり詰まっていたのは、瓶詰めされた緑の液体だ。飲み薬か塗り薬だろうと当たりをつけ、五個あった木箱を全て回収する。

重たい木箱を雪道に下ろすと、その間にバックは魔法を行使——青白い光が大気中の水分に干渉し、生み出される氷が小さなソリを形作った。

その上に木箱を乗せて、エミリアはソリを引っ張って雪道から『庭』に戻る。
「荷車は捨てていくしかないね」

「あんな大きい森を通らないもん。……たぶん、雪荒らしに壊されちゃうけど」
「遊び道具をあげれば満足するかもしれないね。置いてこ置いてこ」

エミリアの引くソリの上に座り、バックが気軽にそんな指示を飛ばす。その言葉にエミリアは肩をすくめると、改めてソリを引っ張って歩き出した。

「うっかり雪道」を抜けて『庭』に帰り、日課の続きをしなくてはならない。

「はいよー、はいよー」

「もう、なにそれ」

バックの歌うような掛け声を聞きながら、エミリアはソリを軽々と引いていく。
細腕には似合わない力仕事だが、それを思わせないほど力強い足取りで。

4

——森に入った人間を片っ端から追い払う。例外なし、容赦もなしだ。

それはエミリアが誰に言われたわけでもなく、自発的に始めた治安維持活動の方針だ。
始めた切っ掛け、そして思惑は色々複雑だが、端的にいえば「自分の居場所を荒らさ

れないため」というのが動機の大部分になるだろうか。

自分勝手である自覚はあった。だが、森にやってくる輩は何故かみんな良からぬことを企んでいるので、無理に追い払うことへの罪悪感はい毎に目減りしていく。

それを理由に、自分を正当化すべきではないとわかっている。

「それにしても、今日の子たちは性質が悪かったよね」

短い腕を組んだバックが、その言葉の内容に反して呑気な顔つきで言った。

髭面率いる集団を退け、回収した木箱を乗せたソリを自宅に運んだあとだ。中断していた日課を再開するエミリアの後ろで、バックはお冠だった。

「んー、そうだった……かも？」

「殺されたのにふにゃつとしたこと言って、この子は。せつかく親切心で忠告してあげたのに、逆ギレなんてたまらないよ。そう思わない？」

「でも、私の話しかけ方が悪かったのかもしれないじゃない？」

「甘い！ 甘々だよ！」

ぴしやり、とバックがエミリアの意見を切り捨て、尻尾を突き付けてくる。

「いいい？ 自分も悪かったかもって考えるのは大事だけど、君の場合は考えすぎだよ。

『でも』とか『だけど』は聞き飽きた。しばらく使っの禁止」

「ええー、でも」

「しっぺ！」

「いたっ……くない」

言われた直後に禁句を口にして、唸る尻尾がエミリアの腕を叩いた。絶妙に手加減されていて痛みはなかったが、音がすごかったので思わず声を上げてしまふ。

「今の、しっぺ……って、なに？」

「聞き分けのない子へのお仕置きだよ。子どものうちにちゃんと学んでおかないと、さっきの連中みたいな大人になるからね。まったく、あの子たちの親の顔が見てみたいよ。

……親も髭がモジャモジャなのかな？」

「ぶ」

自分の髭を引っ張るバックの不意打ちに、エミリアは思わず噴き出す。しかし、すぐに「おほん」と咳払いしてそれを誤魔化した。

「お髭としっぺはともかく……最近、変な感じはするのよね。なんだろ、誰かに見られてる気がしたり、森が騒がしかったり……気のせいなのかな」

「……。まあ、視線はボクが犯人かもしれないけどね」

唇に指を当てるエミリアの疑問に、バックは顔を洗いながら軽口で応じる。一瞬、その応答に間があった気がしたが、それを問はずよりバックの方が早い。

「森の騒がしさの犯人だけど、そもそも、君はさっきの子たちみたいなのが何しに森に入

ってきてるのかわかってる？　なんとなくで相手してない？」

「そ、そんなことないわよ。目的はその、すごく悪いこと……でしょ？」

「うんうん、そうだね。可愛い可愛い」

「なんで優しいの？　私、間違ったこと言った？」

小猫に頭を撫でられながら、エミリアは眉を顰める。その様子にバックは長い尻尾を立てて、かしまった風に講義を始めた。

「さすがのボクも、森の外の情勢にまでは詳しくないんだ。だけど、森にやってくる子たちの目的ぐらいはわかってるよ」

「バック、今、禁止の『だけど』って言った！」

「ボクはいいの。エミリアはダメ」

「それ、横暴……」

「横暴結構。で、話は戻るけど、あの子たちの目的はひっそり森を横切ること。……運ぶ荷物を人目に触れさせたくないんだろうね」

「……その荷物って普通に運んじゃダメなの？」

バックの言葉にピンとこず、エミリアは首を傾げる。

「運んじゃダメなんだろうね。森の外には色んな決まり事とかがらみがあるんだ。場所によっては道を歩くだけでお金がかかったりもするし」

もつともらしく説明するバックだが、エミリアはそこでムツとした顔になる。時々、バックはこうやってお話にそれらしく嘘を混ぜ込むのだ。

「またそうやって騙そうとして。そんなことあるわけないでしょ、もう」
 「勝ち誇ってるけど、嘘って?」

「道を歩くだけでお金が取られるなんて、みんなすぐ困っちゃうじゃない」
 「そうだよ、みんな困るんだ。だから、あの子たちは森を通りたがるんだよ」

しかし、普段はすぐに嘘を認めるバックが今回は発言を引っ込めない。その態度から嘘ではないのだと理解して、エミリアは目を丸くしてしまった。

「森の外だと、物どころか道まで人のモノだったりするからね。通る人、運ぶ物でそれでお金を取られる。ほら、森を通りたくなる気持ちもわかるでしょ?」

「……じゃあ、私がしてることってひどいことなのかな」

バックの大きな説明に、エミリアは難しい顔をして足を止めた。その思い悩むエミリアに付き合ひ、空中で止まるバックは尻尾の毛繕いをしながら、

「どうしてそう思ったの?」

「だって、森の外にそんな事情があるなら、あの人たちが森を通りたがる理由もわかるもの。それを私が邪魔するのは勝手すぎるって……」

「んー、確かにこれが君の私利私欲が目的なら悪いことだろうね」

不安になるエミリアの呟きに、バックは毛繕いを続けながら頷いた。

「でも、君の望みはそうじゃない。君の望みは『庭』を守ること、それだけだよ」

「……うん」

「それは君の事情だけど、森の中が危ないのも事実だからね。あの子たちも、魔獣に襲われるぐらいなら、君に襲われて荷物をなくす方が死ぬよりマシだと思っし」

沈んだ顔のエミリアを慰めるように、バックが優しい言葉をかけてくれる。

その言葉に驚かされるエミリアを見て、バックが心外そうに耳を立てた。

「なんでそんなに驚いてるの?」

「だって、バックがこんなに優しいこと言ってくれるなんて思わなかったから」

「ひどいなあ。ボクはいつでも優しく可愛くて毛むくじやらのに」

「いつもは毛むくじやらとしか思ってたから……」

「どいひー!」

「あはっ」

エミリアの所感にバックが大げさにひっくり返る。その反応にエミリアは今度こそ声を出して笑ってしまい、しばらく言葉が出なくなってしまった。

「——うん」

やがて、笑い疲れたエミリアは息を整えて、バックに頷きかける。

「わかった。もうちよつとだけ、自分のやつてることに自信持つてみるね」
 「そうしなよ。それに、これまで森にきた子の全部が悪者だったわけじゃない。本当に迷子になっただけの子を、外に案内してあげたこともあったじゃないか」
 「あの子たちも、ホントはお金のかからない道が目当てだったのかしら……」
 「五歳ぐらいの子がそんな目的できてたら世も末だなあ」

思いつ話も切りのいいところで、二人は霜の積もる氷像の前に到着した。予定外の朝の一幕もこれでおしまい、エミリアは日課に戻る頃合いだ。

「それじゃ、私はみんなのお世話の続きをしなくちゃだから」

「ボクも、いつもより長く実体化してたからおねむだよ。でも、君がどうしてもボクがいないと寂しいんなら、消滅するのを覚悟で付き合おうよ」

「はいはい、おやすみなさい、ぐーたらバック」

フードから髪を引つ張り出し、エミリアはつれなくバックを追い払う。そのすげない態度に小猫は瞳を潤ませ、儂げな雰囲気足下から霧散し、消えた。

「死んじやうみたいなの消え方して。変なことばかり覚えるんだから」

と、自分よりよほど物知りの精霊を評しながら、エミリアは新しい手拭いを手に氷像に歩み寄る。そして、他の氷像と同じように丁寧に霜落としを始めた。

「おはよう……って時間じゃなくなっちゃったけど、ごめんね」

返事のない相手の顔に布を当て、降り積もった雪と霜をこそぐように落としていく。慎重なエミリアの手つきに、氷像の見映えはどんどん元の状態を取り戻していった。

——それは恐ろしく精巧で、人為を超えた次元に仕上げられた氷像である。

人体の骨格、表情、着衣に至るまで完璧に再現され、本物の人間を凍らせたのだと聞かされれば信じてしまいかねない出来映え——否、それはただの事実だ。

「よいしょ、よいしょ」

額に汗を浮かべながら、エミリアは丁寧に丁寧に、時間をかけて氷像を手入れする。

エミリアの手で毎朝、綺麗な状態を保ち続ける氷像は全部で四十九体。

その全てが、実在した誰かが氷漬けにされた氷像であり、エミリアにとってかけがえのない同胞たちの成れの果てだった。

自分を含めて、ここは五十人のエルフが暮らす、雪と氷に覆われた白い森——。

——誰にどう見られようと、少なくともエミリアはそう信じていた。

5

——大森林はどこもかしこも白く染まり、世界は右も左も等しく終わっている。

日課に向かった少女と別れ、実体化を解いた精霊は、そのまま森の一角へ向かう。向かった先、そこにほんのささやかな変化が生まれようとしている。それは些細な変化であったが、放置すれば看過できないものになりかねない。

——それは、火に似ている。
 始まりは小さな種火であろうと、小さな火は炎に変わり、やがて焔ほのおとなって大火となつて、容易く全てを灰にする。森も、人も、あの少女さえも——。

「消えろ」

まだ燃え始めの種火を、白い世界を塗り潰そうとする光を、先んじて握り潰した。それを見届け、精霊は実体さえ曖昧な力の塊かたまりとなったまま、空を仰いだ。

「あの子には、まだ時間が必要だよ。——できるなら、ずっとずっとこのまま」
 眩くらみきには、ただただ痛切な願いが込められていた。

それは親愛であり、信愛であり、深愛しんあいであり——。

そんな寂しげな響きだけを残して、今度こそ精霊は大気の中に霧散した。

第二章 『ボクはここにいる』

1

親竜王国ルグニカ北東部、エリオール大森林は通称『氷結の森』と呼ばれている。

この森はルグニカ国内では非常に稀有な環境が認められる土地で、その特異性は記録によると、およそ百年以上も昔から続いているとされる。

火季と氷季、季節の移り変わりによる寒暖の訪れるルグニカでは、年間を通して降雪の見られる地域は北の極一部だけだ。そして、年中、雪に覆おおわれるエリオール大森林は他の地域と比較しても、明らかな異常気象に見舞われ続けている。

こうした異常気象の原因、それは『精霊』にあると一般的には考えられている。

一例を挙げれば、国土を永久凍土えいきゅうとうどに覆われるグステコ聖王国では、精霊が当たり前のように国中で目撃され、『グステコ聖教』なる精霊信仰が国家的に崇あがめられている。過酷な環境は精霊のもたらす試練とする教義で、国民の大半は教えを信じて疑わない。

精霊の力が世界に影響を与える、それはグステコ聖教に限らず常識だ。精霊を尊たつとぶ考え

も普遍的なものであり、これが通用しないのはヴォラキア帝国ぐらいのものだろう。ただ、そんな帝国であっても、精霊が強大な力を持った存在であり、迂闊に刺激すれば災いを招く、といった認識は共有されている。

——話が長くなつてしまったが、結論を述べる。

ルグニカ王国に存在する、エリオール大森林の異常気象。その原因は森で暮らす精霊の影響であり、それほどの力を持つ精霊の機嫌を損ねることは得策ではない。

それが、エリオール大森林に対するルグニカ王国の見解だ。故に、エリオール大森林は今日まで、何者にも脅かされないまま在り続けたのである。

——もつとも、そんな事実は森で暮らす少女には知る由もないことだった。

2

「——バック、見て！ キラキラ石がたくさんある！ ここ、当たり前だわ！」

そう歓声を上げ、エミリアは地面に寝転がったまま大きく手を振っていた。

大森林の奥深く、そこに古木ばかりが凍結した『よほよほ密林』がある。伸びた枝葉に日差しが遮られ、一日中薄暗い情景の広がる場所だ。

その足下もおぼつかない暗がりの中、地面に寝そべるエミリアは瞳を輝かせていた。

「大当たりはいいけど、採りすぎ注意だよ。ほどほどにしないと価値が下がるから」

そして、感動するエミリアの隣に寝そべり、尻尾を振っているバックが忠告する。その小猫の黒い眼にも、彼女の大発見はしっかりと映っていた。

二人の眼前には、地上まではみ出した古木の根が幾重にもうねって重なり合っている。その根の隙間を潜って進むと、やがて隠れていた大地の断層と出くわした。その凍った大地の断面は、光のない暗所でも煌めいているのがわかる。

——キラキラ石、エミリアがそう呼んだ輝石の採掘場だ。

「価値が下がるってどういうこと？ 綺麗なのは一緒でしょ？」

「君ぐらい素直な感想をみんなが持つてくれればいいんだけど、同じものがたくさんあるってわかると、希少価値が薄れたように感じるのが人間心理だからね」

バックの言い分に首をひねりつつ、エミリアは匍匐前進して断層に這い寄り、そして、取り出したナイフを使って、輝石を丁寧に凍土から剥がし始めた。

「あ、あ、これ、すごく気持ちいい。なんだか耳掃除してるみたい……」

「これだけ綺麗な石でその感想。ボク、嫌いじゃないなあ」

「それって褒めてるの？」

「もちろん。君は幸せを素朴に表現するのが上手だね。素敵だよ」

錆びて欠けたボロボロのナイフで壁を削るエミリアを、バックは肉球で音のしない拍手をしながら応援する。正直、気が散る。

ともあれ、バックの言葉は基本的には善意の助言だ。あんまり順調に剥がせるものだから夢中になってしまいが、採りすぎで価値が下がるのは困ってしまう。

エミリアにとって、生活を支える収入源はこれしかないのだから。

「それに、全部剥がしちゃうと新しくキラキラ石ができなくなるのよね」

「うん。輝石は自然にマナが溜まって生まれる。その輝石がより多くのマナを蓄えると魔石になって、その魔石を中心に他の輝石もできやすくなる。それが魔石がたくさん作られる環境の仕組みだから、ほどほどに残すのがコツなんだよ」

「ふーん、バックってホントに物知りよね」

「マナ博士って呼んでもいいよ。それに、ボクはエミリア博士でもあるんだ」

自分の髭に触れながら、バックは目を丸くするエミリアに「にやふふ」と笑った。

「ホントだよ。君はねー、このキラキラ石をたくさん集めると、人にあげるのが惜しくなって部屋いっぱい飾っちゃうんだよ。そんな未来が見える、見えるよー」

「それ、未来が見えるんじゃないやなくて、ずっと前にしたこと……」

「歴史は巡り、人は過ちを繰り返す……あ、今って博士っぽくない？」

同意を求められても、その博士っぽさがなんなのかエミリアにはわからない。

ただ、バックの言い分に一理あるのも事実だ。以前、回収した魔石を手放すのが惜しくなって、部屋の奥にこっそり溜め込んでいたことがあったのだ。

「あんなにいっぱい集めたのに、いつの間にか光が消えて石ころになっちゃって」

「マナの塊だからね。より大きいマナの塊が近くにあって、ちよつとずつそつちにマナが吸われて空っぽになっちゃうのも仕方ないよ」

「よりおっきなマナの塊……?」

「まあ、ボクだよ」

しれつと言われて、エミリアは閉口してしまふ。そうして押し黙るエミリアに、バックは悪びれない態度のまま何度も頷いた。

「つまり、ボクが君の傍にいる限り、輝石は持ち歩いてても石ころなんだよ。それはまさに宝の持ち腐れってこと。さ、未練が残らないうちにご飯と交換しといて」

「わかった、わかりました！　そうやって聞き直って、バックってズルい……」

不満をこぼしながらも、エミリアはバックの言葉に素直に従う。嘆息するエミリアは巾着袋に削った輝石を入れ、重さを確かめてから古木の採掘場を脱出した。

雪で汚したロープの裾を払い、エミリアは新たに発見した採掘場の目印を手近な大樹にナイフで刻む。バックの似顔絵だ。我ながら、なかなかの出来だと思ふ。

「潰れた魔獣？」

意地悪なバックの指摘は無視して、エミリアは森の奥深くから『庭』に戻る。しばらくして歩き慣れた道に出ると、エミリアは緊張の解けた顔で息を吐いた。

「やっぱり、まだまだ森にも知らないところがいっぱいあるわね」

「なにせ、森の調査隊はボクと君の二人ぼっち……なのにボクは協力的じゃないから、実質はエミリア一人だ。それでも、あの前衛的な地図はちよつとずつ完成してるけど」

「ゼンエーテキとか、また難しいこと言って誤魔化すんだから」

「それは誤魔化したんじゃない、ただの素直で優しい感想だよ」

猫丸出しの外見と裏腹に、博識なバックはエミリアにわからない言葉を使うことも珍しくない。それは決まって、バックが自分の本心をエミリアに明かしたくないときだ。

それを少しだけ寂しく思うが、それこそ身勝手だとエミリアは頭を振る。

「はぶんちよにされてるみたいにな気分になるけど……」

「ボクもたまに君が何を言ってるのかわかんなくて、お互い様だと思っただよね」

エミリアの眩きを聞きつけ、バックはそんな風に人間臭く肩をすくめてみせた。

そんな会話を続けている間に、二人はエミリアの自宅に戻ってきた。住居に改造された大樹の根元にはソリが置かれていて、そこには先日の戦利品も積まれたままだ。

これから輝石と一緒に、この使い道のない回収品も処分に向かう予定だ。
「それにしても、このソリでずつと消えなくて便利よね」

「ボクっていう匠の仕事だからね。あとで坂道でも滑って一緒に遊ぶ？」

「すぐく楽しそうだけど、そんな暇はないからまた今度ね」

遊びの誘いを断って、エミリアは苦笑しながらソリを引っ張って歩き出す。木箱も結構な重さがあるが、バックお手製のソリのおかげで難なく雪道を進むことができた。

それでも、平坦な道しか進めないのはソリの構造的な欠陥だ。普段は悪路を飛ぶように移動するエミリアだが、今日は緩やかで平坦な道を選んで目的地向かう。

「この『うねうね森』も、前より雪が深いみたい。歩きにくくなってる」

「安直だなあ。うねうね、うねうね……」

「文句言わないの。私の地図なんだから、私が好きに名前を付けます」

ソリの上でしかめつ面のバックに、エミリアは拗ねた風に頬を膨らませる。

たびたびバックは、エミリアが名付けた森の難所の名前に文句をつける。いい加減、エミリアも意地を張って、小猫の意見に耳を貸さなくなってきたほどだ。

わかりやすく忘れにくい、とてもいい名前だと思っただが。

「うねうね……あ、そろそろ出口だね。ボクはそろそろ隠れるけど、君もフード被るのを忘れちゃダメだよ」

「うー、腑に落ちない。……でも、わかってます」

『うねうね森』の終わりに差し掛かり、ソリから浮かび上がるバックの指摘にエミリアは

不承不承頷いた。フードを被り、銀髪を隠す。その様子にパックは満足げに笑い、そのま
ま何の前触れもなく、小猫の姿はふっと薄れて大気に同化してしまった。

「……こうやって急に消えるの、パックの悪い癖よね。最初はすごく驚かされて」

今では見慣れた精霊の消失だが、初見のときは本当に驚かされた。

大気中のマナで構成された精霊の肉体は、紡ぐもほども精霊の意思次第だ。それを知
らず、何の説明もなく消えられたときはショックで泣きそうになったものだった。

翌日、当たり前のように顔を見せたパックへの怒りは今も忘れていない。

「ととと、いけないいけない」

考え事にのめり込みそうになり、エミリアは意識して自分の頬を引き締める。

もうすぐ目的地なのだ。へらへら笑っている場合ではない。

もともと、その場所が近付けば近付くほど、エミリアの頬は自然と強張り、心がざわつ
きながらも静かになっていくのが自分でもわかっていた。

この先に待ち受けるのは、エミリアにとってそんな覚悟が必要となる場所だ。

「――」

パックと別れ、一人きりになったエミリアの周囲で森の雰囲気が変わる。その変化は誰
の目にも明らかなので、ますますエミリアの心のざわつきが大きくなった。

周囲、白い雪や氷に覆われていた木々が緑に色付き、華やかに彩られていく。

エリオール大森林の冷気は、森の深奥へ進むほど険しさを増していく。だが、その影響
も森の外に向かうにつれて薄れてゆき、外周は普通の森と遜色がなくなる。

無論、それで寒気の全てが消えるわけではないが、人が暮らせないほどではない。

寒さの和らぐ森の外側――そこには『人間』の暮らす集落があるのだ。

「――到着、と」

ソリを引いていた足を止め、エミリアは眼前の光景に目を細める。

緑の木々の隙間から覗けるのは、小さな家々の立ち並ぶ人の集落だ。レンガ造りの家、
色褪せた服を着た村人たち。おおよそ四、五十人ほどが暮らす村で、あまり裕福ではな
いとパックから聞いた。

村の規模に関しては受け売りだが、寂しく感じられるのはエミリアにもわかる。彼らも、
パック以外では氷像としか話さないエミリアに言われたくないだろうが。

「――」

そんな感慨を切り捨て、エミリアはわずかな逡巡を殺して村に足を踏み入れる。村を囲
う柵の切れ間からソリを通して、靴裏に土の感触を確かめながら敷地に入った。

時刻はお昼を大きく回り、そろそろ夕刻の近づく頃だ。

日の長い季節に入り、中天にある太陽から注ぐ日差しは明るく、日の傾きを感じるには
まだ余裕がある。それだけに、村の中心の小さな広場には楽しげに駆け回る幼子たちの姿

があり、聞こえてくる歓声にエミリアは口元を緩めた。

人口の少ない寒村だが、ああして子どものはしゃぐ姿に貴賤はない。

幼子が楽しげにする姿を微笑ましく思うのは、万人に共通した感覚だろう。少なくともエミリアはそう思うし、いつまで見ても飽きないとも思っている。

ただし、そんなエミリアの願望は、他でもない彼女自身が理由で叶わない。

「あ……」

か細い声を上げたのは、広場ではしゃいでいた子どもの一人だ。振り向いた少年は視界にエミリアを捉えると、それまでの笑顔を一変させ、頬を強張らせる。

その顕著な反応に一人が気付けば、連鎖的にそれは広がる。森から現れたエミリアを見る彼らは、密やかに言葉を交わすとそそくさと広場を出てしまった。

「……」

その素早い避難に、エミリアの方から声をかける暇もない。

弁明すら許されない拒絶に、エミリアはわかっていてもため息をつきたくなる。

「……別に、なんにもしないのに」

村中に警戒と畏怖の気配が広がるのを感じて、エミリアは思わず愚痴を漏らした。

子どもたちが大人に、大人が隣人に『森の人』の来訪を伝えたのだ。おかげで村は厳戒態勢、件の『森の人』であるエミリアは、足早にソリを引いて目的の建物へ。

広場の奥にあるのは、この村唯一の市場——とは名ばかりの、一種の交換所だ。

村の人間が農作物や畜産物を持ち込み、手早く交換するのを目的とした建物である。集落の規模通りささやかな品揃えだが、エミリアには十分だ。

その交換所の入口にソリを置き、エミリアは一度、深呼吸してから建物に入る。

「……あんたか」

屋根があるだけの空間、商品を並べた長机の前に座るのは老齢に差し掛かる男性だ。頭に鉢巻を巻いて、眉間に深い皺を刻んだ男は低い声を発してエミリアを睨みつける。その声と目つきは明らかに、エミリアのことを歓迎していなかった。

だが、無視して遠ざけられることはない。そのことにエミリアは安堵する。

「いつも通りをお願いします」

「……あいよ」

多くの言葉を交わすことなく、言葉少ななエミリアの注文に男は腰を上げる。彼は足下にあった籠を拾うと、その中に適当な手つきで作物や香辛料を投げ込んでいった。

その間にエミリアは懐から巾着袋を取り出し、削ってきたばかりの輝石を用意する。

「靴は」

「え？」

「……靴だ。どうする」

しゃがれた男の眩つよきに、エミリアは一瞬あっけ呆気にとられる。だが、すぐに自分の足下を見下ろし、ほとんど素足同然に壊れた靴に気付くと大慌てで、

「あ！ お願いします。この前は、もう見ての通りボロボロになっちゃって……」

「……」

「なっちゃって……」

そのエミリアの発言に何も言わず、男は建物の裏側へと引っ込んだ。

雑談を投げた姿勢のまま、エミリアは取り付く島もない態度に苦笑い。ただ、自分から言い出す前に靴に気付いてもらえたことは嬉うれしくて、頬ほおがにまにましてしまふ。

「……ほら」

「ありがとうございます。——ん、びったりです」

戻ってきた男が差し出したのは、皮と布をつぎはぎした粗末な履物だ。

基本、森の中を駆け回るエミリアはすぐに靴を履き潰つぶしてしまふ。それならそれで素足で活動してもいいのだが、人前に出るときに裸足はだしなのはあまり良い印象は与えない。これも、エミリアが実体験で学んだ知識の一つである。

渡された履物の大きさと感触を確かめると、エミリアは採取した輝石を男に渡す。受け取った輝石あまたを検めると、男は代わりに商品の入った籠かごをこちらへ押し出した。

それを受け取り、エミリアの村での買い物は終了だ。

親しい仲ならこのまま世間話でもするのだろうが、生憎あはげと男性の視線はそれを歓迎してくれていない。そのままですごく退散し、『庭』に戻るのがいつもの展開だ。

しかし、今日のエミリアの用事は買い物だけでは終わらない。

「あの、実はまた、森に置き去りにされたものを持ってきたんですけど……」

エミリアの申し出に、仕事の終わった顔でいた男が眉まゆを上げる。エミリアは交換所の外に出ると、入口に置いたソリと、運んできた木箱を男に指し示した。

森の侵入者が置き去りにした積み荷の処分法——それが、こうした村への譲渡だ。

毎回、エミリアは侵入者が残した荷物を村へ運び、村人に譲り渡している。元の持ち主に返せない以上、せめて彼らに有効活用してもらいたい一心だ。

「……わかった。引き取らせてもらう」

「お願いします」

木箱の中身を検あめ、瓶詰めあの薬を引き取って男は顎あごを引く。その後の取り扱いを村に委まかねると、エミリアは頭を下げて今度こそ交換所をあとにした。

広場を通り抜け、森に戻るエミリアは一人の村人ともすれ違わない。『森の人』が森に帰るまで、誰も外を出歩かない決まりでもあるのかもしれない。ここまで拒絶あの態度を露あわにされると、交換所の男の無愛想な態度でもマシに感じられる。

一度、交換所の担当が女性だったときなど、エミリアの訪問に驚いてひきつけを起こし

てしまい、買い物どころか言い訳もできずに追い払われたこともあった。

以来、交換所の担当には常に男性が立つようになったらしく、申し訳なく思う。

「そんなに怖がられる顔してるのかな、私……」

べたべたと自分の頬に触って、エミリアは自分の顔の部位の位置を確かめる。ただ、触れた指の感触からは、自分の顔の造形は伝わってこない。

——自分がどんな顔をしているのか、それはエミリアにとって恐怖に繋がる疑問だ。

「——」

エミリアは顔に触れるのをやめると、嘆息を堪えながら元きた森の道へ戻る。そのまま森に足を踏み入れ、『庭』に帰ろうとして、その直前で振り返った。

——ずっと、誰かに見られているような奇妙な気配を感じるのだ。

「……変な感じ」

村の人間の視線とは違う気がする。彼らはできるだけ、『森の人』であるエミリアに拘らないようにする。それは接触だけでなく、見ることもすらもそうだ。今日のようにこちらから近寄らない限り、彼らの生活にエミリアは存在していない。

だからこそ、へばりつくような視線には違和感を覚えた。

「——」

とはいえ、この視線の正体を確かめようとエミリアは考えない。

長く村に留まれば、それだけエミリアも村人も嫌な思いを味わう。自分が我慢すれば事が収まるなら、大多数の安寧のために我慢すべきだ。

「いこ」

短く自分に言い聞かせて、エミリアは絡みつく視線を振り切って森に戻る。

新品の靴で柔らかい土を蹴って、緑色の木々の中を飛ぶようにして駆け抜けた。そうして走り続ければ、次第に呼吸は白くなり、景色から色が抜けて銀世界が現れる。

やがて、靴裏の感触が土ではなく、霜を割るような慣れたものに変化し——、

「——おや、戻ったみたいだね。おかえり——」

そんな声が出て、エミリアは地面を削るように強引に足を止めた。息をつき、顔を上げるエミリア。その様子に、すぐ頭上にいたバックが目を細める。

「その様子だと、またぞろストレスな思いをしてきたのかな？」

「……いーえ！ そんなことありません。今日はいつもの倍はお話できたもの」

「そう？ でも、それなら顔を隠したままだったのは失礼だったんじゃない？」

含み笑いたったバックの指摘に、エミリアは自分がフードを被ったままだったことを思い出す。慌ててフードを脱いだその頬は、小猫にしてやられてほんのり赤い。

「リンガみたいなのほっぺで可愛いね」

「……バックって、ホントにすごく嫌味」

「初心で可愛いって褒めてるのに。それで買い物はともかく、木箱は喜ばれた？」

その話題の転換に、エミリアは不満を抱えたまま首を横に振った。

「んん、わかんない。店番の人、顔に出ないんだもん。あと、村つていえば……」

「村つていえば？」

話の流れで村の視線——自分に向けられた粘つくそれに触れそうになり、正直に報告すべきかエミリアは躊躇った。

躊躇った理由は反抗心と、心配をかけたくない気持ちの二つだろうか。

バックに報せて、いつものように子ども扱いされたくない反抗心。それと、この話をし

て彼に心配をかけたくない気持ち。——それが、口を嚙ませる。

「——ん、とね。そう、靴のこと。実は今日、私が言い出す前に靴のことに気付いてもらえたの。前の靴ってボロボロになってたでしょ？ そのことに」

「それって、毎回、君がすぐ靴を壊すからいい加減に覚えてただけなんじゃない？ きつと向こうは呆れてると思うよ」

「呆れたのが理由でも、小さいことを覚えてもらえたのが大きな進歩なの。このままいけば、ひよっとして天気のお話とかできるかも……」

「不慣」

本題を誤魔化そうとしたのに、バックに憐れみの目を向けられて本気でむくれる。

天気の話をするのは、いずれ村人との関係が劇的に改善されたときのエミリアの目標だ。毎日変わるし、天気は万能だ。他の話題はちよつと思いつかないが。

「大体、この森の近くじゃ天気なんてほとんど関係ないじゃない。ずっと曇りか、そうでなきや雪がちらつくだけ。あの村だって一緒だよ」

「いいの！ その当たり前ができるってことが大事なんだから」

「ホントに？」

「こんなことで嘘ついてなんになるの！ ホントにホント、嘘じゃないんだから！」

疑いの眼差しをするバックに言い返しながら、エミリアは悪い気はしていない。何はともあれ、こうして自分の言葉にちゃんと誰かの言葉が返ってくることに。

——無言の氷像に語りかけることに慣れたエミリアには、とても贅沢なことなのだ。

3

暗い、薄暗い部屋だった。

窓とカーテンが閉め切られ、部屋には全く光を取り込んでいない。室内には暗闇と静寂が同居していて、禍々しい雰囲気立ち込めている。

室内は無音、ではない。微かな、ほんの微かな音だけが絶え間なく連続していた。

——それは掠れた息遣いと、湿った何かを爪が掻く歪な異音だ。

板張りの部屋には簡素な寝台と、光の消えた結晶灯が置かれている。安物の寝台の上に無言の男が座り込み、顔に巻いた包帯の上から傷口を掻き筆っていた。

傷は顔面の右側、その大部分に及んでおり、耳は失われている。見るからに痛々しい姿だが、傷を弄る男の形相に苦痛はなく、瞳は血走った憎悪に染まっていた。

原因はカーテンのわずかな隙間、そこから覗くことができた外の風景——数時間前にその風景の中に見つけた、白いローブ姿の女だ。

自分たちの商売を邪魔してくれた上に、生き方を侮辱してくれた憎き相手。それだけではない。あの女の発言と村での動向、それを考慮すれば——、

「ボス、失礼しやす。と……お」

部屋の扉がノックされ、返事を待たずにだみ声の若者が部屋に入ってくる。若者は室内の暗さにたじろいだが、寝台に腰掛ける男に気付いて姿勢を正した。

無言で、男は部屋に入った若者の言葉を促している。沈黙からその指示を察して、若者は背筋を正したまま、寝台の上の包帯男——髭面の頭目に口を開いた。

「ボスの推測通り、当たりです」

「……間違いないえな？」

「話したがりがりやせんでしたが、ちよいと脅して吐かせました。どうします？」

部下の報告を受け、髭面は傷口を掻き筆る指を止めた。そのまま血と膿で汚れた指の臭いを嗅ぎ、その悪臭に凶相を愉しげに歪ませた。

「——檻を持ってこさせろ」

「檻、ですか？」

「そう言えばわかる。あとは手勢もだ。揃い次第、動くぞ。準備させておけ」

狂気的な目で言われ、戸惑っていた部下は息を呑みながら頷いた。それを見届け、髭面は暗い部屋の壁を睨み、その向こうにある森を思い描くと、

「さあ——檻に入れて、イジメて飼い殺してやるぜ、お姉ちゃん」

そう言っ、いやらしくいやらしく、舌なめずりをした。

4

——雪道の騒動からも、村での買い物からも数日が経過していた。

その間、少なくともエミリアにとっては代わり映えない毎日が続いていた。

朝、目が覚めると『庭』の氷像の手入れに向かい、途中でちょっかいをかけてくるパツクと合流する。その後は朝食を済ませ、大森林の地図を作るための調査だ。

昼を過ぎると、またしても現れるバックを適当に相手して、日没前には調査を切り上げて帰途につく。そして夕食と水浴びが終わると、あとは眠って一日が終わる。そんな時間が、穏やかに何事もなく繰り返された。故に、だろう。平穏な時間が過ぎて、エミリアは村で感じた不審な視線のことなどすっかり忘れてしまっていた。脅威だとも思わないまま、それは記憶の底に沈んでいく。それはこの日も、全く同じだった。

「じゃ、寂しいかもしれないけど、今日のボクはちよっぴりお出かけするよ」

と、バックが開口一番に言ったのは、目覚めたエミリアが冷たい小川の水で顔を洗い、かろうじて現実を意識が繋がった直後のことだった。

「うみゆ……」

「うん、そうなんだ、お出かけなんだよ。ボクがいなくても泣いちゃダメだからね」

「ないたり、しないけど……」

致命的に朝に弱いエミリアに、バックがもったいぶりながら手拭いを渡してくれる。のろろと濡れた顔を拭くエミリアは、ようやく話題に理解が追いついた。

「別にどこで何するのもバックの自由だけど……たまに、こんな日があるのよね」

「ちゃんと予定を伝えるだけ、ボクは風来坊にしては出来すぎだと思うよ」

「それは……うん、そうよね。そう思う」

その言い分に頷いて、エミリアは口元に手拭いを当てたまま目を伏せる。長い睫毛に縁取られた瞳を何度か瞬きさせて、彼女はバックを見上げた。

「それで、どこにいくのか聞いてもいい？」

「内緒。でも、危なくもいけなくもいかがわしくもないよ」

「そうやって言われると、なんだか全部怪しく思えちゃう」

「ボクはしないうって言ったことはしないよ。だから地図作りも手伝わないでしょ？」

「それ、自慢にならない……」

何を言ってもバックの方が上手で、いつものように煙に巻かれてしまった。

「ホントに秘密？」

「うん、ごめんね。でもほら、秘密は女の子を綺麗にするんだよ」

「え？ バックって雌だったの？」

「んーん、言ってみただけ。ちゃんと雄だよ。それにボクが雌だったら大変なことになるよ。とっても大事な約束が果たせなくなるからね」

「はいはい」

腰に手を当てて胸を張るバックに、エミリアは嘆息しながら頷いた。

まともに取り合う気はないようだし、そもそも詳しく聞く権利もエミリアにはない。こ

うして報告してくれるだけで、この関係の義理は果たされているのだ。

「エミリアの今日の予定は？ 聞いてもいい？」

「聞かなくても知ってるくせに。いつもとおなじです」

「そっかー。……聞いてごめんね」

「パックのイジワル！ もう知らない！」

散々からかわれて、唇を尖らせるエミリアにパックは楽しげに笑った。その笑みに見送られながら、エミリアは氷像の手入れに出かけようと背中を向ける。

だが、そのまま別れる直前に――、

「――エミリア。ボクと一緒にいられないけど、危ないことはしちやダメだよ」

「それはこっちの台詞よ。パックこそ、知らない人についていたり……」

振り返り、言い返そうとしたエミリアはそこで言葉を中断した。

長い尻尾を抱いて、エミリアを見つめるパックの視線は穏やかだった。その黒い円らな瞳に宿る感情は、それなのにひどく真剣なものに思えて。

「何かあったら、どうにかする前に逃げることを考えるんだよ。それで、危ないと思ったら迷わず逃げる。いいね？」

「――」

「間違っても、『氷の花』は咲かせないように。ね？」

「……はーい」

重ねられる言葉に、エミリアは視線を逸らしながら頷いた。

納得とは程遠い態度だが、パックは満足げな様子でその姿を薄れさせる。マナが拡散し、精霊の肉体がほどけて消えるのを見届け、エミリアは唇を尖らせた。

「パックって、ホントにズルいんだから」

普段はとぼけてばかりのくせに、たまにあんな風に真面目な顔をするのだからズルい。あんな風に言われては、誤魔化すことも逃げ出すこともできない。

嫌でも自分の中にある『それ』を自覚して、言いつけに従わなくてはならなくなる。それが正しいのだと、エミリアはもちろんパックも知っている。

あるいはエミリア以上に、パックの方がずっと深く知っているのだ。

その詳しいことについて話してくれないのも、彼の語る『秘密』なのかもしれない。

「――早く、みんなのところに行かなくちゃ」

考え事を始めると切りがない。

エミリアは出口のない思考の迷路への挑戦を投げ出し、日常の業務に立ち返る。そうすることで日々を守ることが、自分の心を守ること繋がる。

無意識にそれを自覚しながら、エミリアは手拭い片手に『庭』へ駆け出していった。

——エリオール大森林の地図作りは、エミリアが発起人となって始めた仕事だ。調査も作成も、全てエミリアが単独で行っている。この件に関してバックはあまり協力的ではなく、口出しこそするものの手助けはしてくれないのだ。

それでも、地図に書き込んだ情報は共有し、使ってくれる姿勢はありがたいが。

ともあれ、地図の作成を始めたのは半年ほど前だが、日々のコツコツとした調査で判明している事実は少なく、森の全貌を描き出すにはまだまだ先が長い。

特に近頃、重点的に調査している北部での作業が難航している。その原因は地形の荒さと、特筆すべき雪深さ。それに加えて——、

「——またあった」

手製の地図に×印を付けて、エミリアは目の前の光景にため息をつく。

凍った太い木々の集まる密林地帯だ。樹林に道を遮られるのも難儀だが、ため息の原因は別——強引にへし折られた倒木、それを無造作に跨いだ痕跡を見つけたことだ。周辺の雪上には轍のような跡もあり、エミリアは眉を顰める。

「こんなところになかったはずなのに……それに、まだ新しい」

轍には薄く雪が積もり始めている。それを見て、エミリアはこの「かちかち密林」がこ

うなったのは、今さっきのことに違いないと推測した。

「——」

地図を広げ、新たに×印のついた『かちかち密林』を見ながら、エミリアは記憶と地図の内容を照合する。そしてすぐ、足早にその場から立ち去った。

狭苦しい木立を抜けるにあたり、エミリアは白いフードを頭に被る。正体を隠す目的ではなく、長い髪が枝木に引っかかるのを避けるためだ。

こうしたときや水浴びの機会など、長い髪の毛を煩わしく思う頻度はかなり多い。いつそ短くしてしまえば、日々の煩瑣な気苦労から解放されるはずだ。それなのに切らずにいるのは、バックが髪は長い方がいいと懇願するのと、不思議な抵抗感があるからだ。

——記憶にないどこかで、長い髪の毛を褒められたことがあった気がするのだ。

「——ついた」

思索の合間に森を抜け、エミリアは白く抉られた大地を見下ろす。それは数日前にも見たばかりの景色で、相変わらずの違和感の塊だ。

『うっかり雪道』は以前のまま、坂下から丘の上に続く轍を残した状態で存在している。

前回と違うのは雪道に不埒な侵入者の集団がないことと、轍に放置してあったはずの彼らの荷車がなくなっていることぐらいか。

「——」

雪道に下りて、深く刻まれた靴を確認する。周囲には先ほどの密林の中よりも濃い色の粉雪が舞っている。だが、靴の底には雪は積もっていない。靴の周囲にも足跡は残っておらず、先日の大立ち回りの痕跡は隠れてしまったあとのようだった。痕跡が消えるのは当たり前だ。当たり前だが、それは少し、やり過ぎている。だから――、

「――いるんでしょう？ 隠れてないで出てきたら？」

靴の上に立ったまま、エミリアは声を高くして周囲に呼びかける。一瞬、その声に返事はなく、雪道には静寂だけが落ちた。しかし、それもすぐに失われる静寂だ。

森の静けさはすぐさま、複数の足音と荷車を引く騒音に掻き消される。姿を現したのは防寒着姿の集団、そして彼らの先頭に立っているのは見知った顔だ。

もっとも、見知った顔ではあるが、見知っていたときとかなり様変わりしていた。

「よお、一週間ぶりだ。会えて嬉しいぜえ、お姉ちゃん」

「……私は、あんまりかな」

雪の坂下に並ぶ集団、その先頭でだみ声を発したのは顔に包帯を巻いた大柄の男だ。声と目つき、そして傷の様子からそれが先日の髭面の男だとエミリアにはわかる。

わかったが、それ以上に男の狂気的な目の色にエミリアは悪寒を覚えた。あまり察しの良くない自覚のあるエミリアでも、彼らの目的が何なのかは明白だ。

誰かに会いたいと望まれることが嬉しくない場合もある、それを初めて知った。

「それにしても、なんで俺たちがここにいてわかった？ 足跡はつかないように気遣ったつもりだったんだがな」

「いると思ってきたわけじゃないわ。別の用事でここにきて、靴を見たらわかっただけ。靴の底に雪がないのは、あなたたちがこの上を通って足跡を隠したからでしょう？」

「ちっ、よく見てやがる。森博士か、お前」

エミリアの答えを聞いて、舌打ちする髭面が傷を掻き毟る。乱暴な仕草で包帯に血が滲むのを見て、エミリアは痛々しさに顔をしかめた。

「私からも聞いていい？」

「なんだ」

「その傷、ちゃんと治療しないと痕が残ると思うの。葉、塗ってる？」

「――ッ！ おい、おいおいおい、こいつは……傑作だな！ 葉？ 葉だと!？」

質問が痲に障ったのか、髭面は唾を飛ばして激昂した。その形相と罵声にエミリアが驚いて困惑すると、その反応に髭面はますますいきり立つ。

「馬鹿にしているのか？ それとも本気で天然でやってやがるのか？ どっちにしても、想像以上に浮世離れしてやがるな。ええ？ おい、『森の人』よお!」

「……その、呼び方」

「誰に聞いたのか、お話する必要はあるかよ、お姉ちゃん」
 嫌な呼び名が耳に入り、露骨に顔色の変わるエミリアに髭面が下卑た笑みを向ける。彼は大げさに腕を振ると、その右腕で森の東側——村の方角を示した。

「うちの商品をよくもまあ、あんなちっぽけな村に横流しにしてくれたもんだ。聞けばお前、森に入った奴の身包みを剥ぐ常習犯って話じゃねえか」

「……何の話？ 私は一度もそんなつもりは」

「睨に傷のある連中は何をされても訴えられない。強かな女だよ、お姉ちゃん」

「勝手なこと言わないで！ 私は一度だって、そんなつもりで動いてない！」

「とほけるな！ 村の奴らがとつくと吐いたんだよ！ ああして村に分け前をくれてやる代わりに、お前は村の連中に口止めをした！ 共犯者にしてな！」

「……え？」

言い掛かりに反論する言葉が、それを塗り潰す悪意に押し込まれた。

瞳目するエミリアの反応を、髭面は凶星を突かれた結果と受け取った様子だ。だが、事実はもつと残酷だ。予想外すぎる内容、それにエミリアの思考が止まった。

あの村の人間が、エミリアのことを彼らにそんな風に伝えたのだと、そう知って。

「村の奴らを恨むのはお門違いだぜ。元々、このルグニカで亜人に加担するなんてちんけな村の人間には重すぎたんだ。破綻は目に見えてんだよ」

「亜人に、加担……？」

「浮世離れしてれば知らぬ存ぜぬで誤魔化せると思ったか？ 下手な芝居はやめてわかりやすくいこうぜ、『森の人』——いや、エルフのお姉ちゃんよお」

立て続けに身に覚えのない冤罪を着せられ、その最後に特大の爆弾が炸裂した。こちらをエルフと断言した髭面に、エミリアはとっさに何も言い返せない。

その凍りついたエミリアの姿に、髭面は「やっぱりな」と目を輝かせた。

「森に住む亜人……それもエルフの山賊行為に手を貸したんだ。あの村の連中も下手打つたもんだな。それはこの国じゃとんでもねえ重罪だぞ！」

「わ、たしは山賊のつもりなんて……それに！ どうして村の人たちまで！」

「時代に取り残されすぎだぞ、エルフ。お前『亜人戦争』も知らないのか？ 内戦で負けたお前らにまともな人権なんかねえんだよ。人間様の近くで呼吸してるだけで犯罪だ。おまけにエルフは亜人の中でも特に嫌われ者だ。当然だろ？」

「なんで……」

「俺がお前の親に見えるか？ 優しく教えてなんかやらねえよ」

震えるエミリアの声に髭面が笑うと、彼の背後で二十人近い仲間も笑い始める。

男たちの悪意に囲まれ、エミリアは強く拳を握りしめた。白い掌に爪を立てて、彼女は速まる拍動と呼気を押さえ付け、髭面の顔を睨みつける。

「何が、望みなの」

「……話が早いのは嫌いじゃねえ。簡単さ」

哄笑を止めて、髭面が顎をしゃくろ。すると、彼の背後に荷車が押し出され、その荷台に乗せられた大きな鉄の塊——四角い、鉄製の檻を見せつけられた。

「俺たちの商品を横取りして、お前は商売を台無しにした。村の人間も同罪だが、俺たちは優しい。お前に贖罪の機会をくれてやる」

「贖罪はともかく……そのことと、その檻と何の関係があるっていうの？」

「鈍いな！ それとも現実が見えてないのか？ お前が！ この檻に！ 入るんだよ！ 商品は取り返す、当然だ。村の人間に償わせる、それも当然だ。そして、一番の加害者であるお前には体で支払ってもらおう。この檻の中で可愛がられてもらってな！」

鉄格子を掌で叩いて、下卑た声を上げる髭面にエミリアは困惑した。言われていることの意味がわからず、検討することもできない。この交渉自体が寝耳に水だ。

「誤解が、あるのはわかった。でも、言いなりになる理由がないわ。確かにあなたたちの積み荷を村に運んだのは私。村の人が私のことをなんて説明したかは……少しだけ悲しいけど、それも後回し。でも、始まりはあなたたちの悪事でしょう」

「悪事、悪事ね。だが、巫人に加担した村の人間の罪はどうなる？」

「そんなの、すごく無茶苦茶だわ！ それに、それは私と村の人の問題よ！ あなたた

ちには関係ないはずじゃない！」

「だが、話す自由は俺たちにある。お前たちのことが許されない、この国にな」

反論を極論に封じ込められて、エミリアは何度も悔しげに口を開閉する。

髭面の言葉は嘘かもしれない。いくらなんでも理屈に合わなすぎる。だが、仮に本当だったとしたら、村の人間も罪に問われるのだとしたら——。

「そこまで言うなら選べよ」

「——っ」

「簡単な話だ。言いなりが嫌だって突っぱねるなら、村の人間が裁かれるのは見捨てちゃえばいい。それが嫌なら檻に入れ。それだけだ」

「そんな、の……」

「お前を売った連中だ。村の奴らに義理立てする必要はない、そうも思うけどな」

悪辣な選択肢を用意しておきながら、髭面はエミリアに選択権を委ねた。にやにやと笑うその態度は、まるでエミリアが迷うのを愉しんでいるかのようだ。

自分と村人、それを天秤に掛けて、エミリアがどちらを選ぶのかを——。

「……私を檻に入れて捕まえて、あなたは何をさせたいの？」

「世の中、好事家って連中には多いのさ。見目麗しいエルフを檻に入れて、思うがまま蹂躪したいって変態はな。俺も、気持ち悪くはない」

「俺はどっちでも構わんぜ。お前が檻に入らなくても、候補なら別にもいる」

「候補？」

「村にも、もちろん森にもな。いるんだろ？ —— お前以外にも耳長が」

下卑た髭面の視線が『庭』の方に向き、エミリアは目を見開いた。

それが『庭』への悪意、氷像となった仲間たちへの害意と感じ取り、理解する。

「——わかったわ」

目をつむり、エミリアは髭面にそう告げた。

迷いがあったわけではない。ただ戸惑いだけがあり、それが躊躇になっただけだ。どうするべきなのか、その答えは最初から出ていた。

エミリアは間違ったのかもしれない。だが、それは彼らも同じことだ。

エミリアにだけ報復したいというなら、その気持ちは理解もできた。しかし、村の人間たちと、森の氷像に手出しすることは許されない。——許さない。

罰されるべき罪があるとすれば、それはエミリアだけの罪過に他ならないのだから。

「私を、檻に入りたいの？」

「……ああ、そうだ。つて言っても、エルフの前評判を確かめてからだがな。せつかくの商品だ。見映えがいいか悪いかは最重要なんでな」

「そう。——それなら、きつと期待には応えられないと思うわ」

髭面の受け答えに、エミリアはお憎様と皮肉に思いながらフードに手をかけた。こんな気持ちで他人に向き合うのは珍しい。——否、初めてのことだ。

相手に素顔を見せることを、その反応を、こんな楽しみに思うことも。

フードを脱ぎ、溢れ出る銀髪を背中に流す。そうして顔を上げ、紫紺の瞳で彼らを真っ直ぐ見やると、露わになったその面貌に全員が息を呑んだ。

声を失い、凝然と自分を見る無数の視線に、エミリアは毅然とした顔を作る。

居並ぶ顔に浮かぶのは、呆然自失と呼ぶ以外にない驚愕だ。それはまさに期待通りの反応で、それなのに胸に痛痒を感じて、エミリアは息を吐く。

「これでも、まだ私を檻に入れない？」

その問いかけに、彼らは一様に怖気を感じたように肩を跳ねさせる。強張った彼らの顔を一つ一つ眺めるエミリアに、誰かがぼつりとこうこぼした。

「銀髪、紫紺の目……銀色の、エルフ……！」

それらの特徴は、エミリアという存在を構成する欠かせない要素であり、この世で最も忌むべき存在の特徴でもある。

それがもたらす根源的恐怖は、他者の心を砕き、怯え疎ませる力がある。

エミリアを初めて目にした集落の女性が、悲鳴を上げて失神したように。この特徴が何を想起させるものなのか、そのときの悲鳴で知っている。

それは――、

「――魔女。『嫉妬の魔女』と、同じだ」

押し黙るエミリアに代わって、男たちの一人がその名前を口にした。

この世で最も恐れられ、最も忌むべき、最も残酷な存在とされる『魔女』のことを。

『嫉妬の魔女』――それは世界中に今もなお、恐怖の代名詞として語り継がれる災厄の存在であり、銀髪に紫紺の瞳をした女であったとされている。

それは全て、エミリアという少女と符合する特徴でもあった。

だからエミリアは、あらゆる人々から疎まれ続ける。あの村の間も例外ではない。ただし、それはエミリアの抱える罪の、ほんの一部に過ぎないが。

エミリアの容姿を目の当たりにして、男たちに衝撃と混乱が広がる。ざわつき、顔を見合わせて不安がる男たち。しかし、その中で明らかに別格の反応があった。

それは狂気と歓喜に満ち満ちた、傷口を掻き搔る髭面の哄笑だった。

「は、はは、ははははっ！ おいおいおい、嘘だろ？ 信じられるか？ 誰がこんなタマ

が飛び出すなんて予想できる!? こいつあ、想像以上だ！」

「……何がそんなに面白いの？」

「お前だ！ お前に決まってる！ 他人にくれてやるのが惜しくなるよ。ああ、できれば俺が一生、檻の中で飼ってやりてえ……！」

予想外の反応に驚くエミリアを、髭面は粘着質な視線で舐め尽くす。その嫌悪感に既知感を覚えて、エミリアは村での出来事を思い出した。

数日前、エミリアに延々と浴びせられていた視線――その正体に今さら気付く。同時に、素顔を見せても引き下がる気配のない髭面とは、話しても無駄であるのだとも。

「わかった。もう十分わかりました。――あなたには、言うだけ無駄なことよね」

「これだけ真摯に話して通じない。わかり合えないのは悲しいぜ」

「ええ。――すごく、そう思うわ」

互いに、交渉にもならない交渉は決裂したと判断する。

エミリアは両手を広げ、髭面の背後の男たちも一斉に散らばり始めた。彼らの手には揃って弩弓が握られており、武装と人数は前回以上に厄介な状況だ。

だが、それでも打倒しなくてはならない。

二十人からなる彼らを打ち倒し、村と森に手出しさせないよう誓わせる。それができなければ、エミリアが守るべき森の安寧は失われてしまうのだから。

「——っ」

開戦の合図はない。エミリアは前触れなく、低姿勢で踏み込んだ。弦の弾かれる音が連鎖し、矢が風を切って次々に飛来する。しかし、エミリアはそれを身を回すだけで回避した。矢の速度は見切れるものではない。故に矢の驟し方は、向けられる殺気に沿って体をひねる、それだけだ。

ただそれだけのことを実現できる人間が、どれほどいるかを別にすれば。

「てい、や——！」

雪に矢が突き立つ音を聞きながら、エミリアは掌底で男の胸を打ち抜いた。毛皮の衣服の内側、胴体に鍛えられた腹筋とは別の硬さを感じる。

鋼板か何かを腹に仕込み、エミリアの打撃の威力を殺したのだ。

「前回の反省を活かす。お前が素手なのは学んだ。準備して当然、だろ？」

「——くっ」

勝ち誇る髭面に奥歯を噛み、エミリアは裏拳で男の顎を弾いた。さらに足を払って昏倒させ、より直接的に意識を刈り取る方向に攻撃をシフトする。

「この、クソ女があ！」

判断の直後、接近された男たちがナイフでエミリアを牽制する。翻る銀閃を避け、跳躍するエミリアは宙で股を割り、前後の男の顔面を強かに蹴り飛ばした。

そのまま宙で反転し、休む間もなく撃ち込まれる矢から飛んで逃れ、即座に別の男たちへ打撃をぶち込んだ。集団が弾け、雪の上に転がっていく。

「おーおー、強い強い。わかってたけど、武器と数揃えてもこれかよ。泣けるね」

仲間が殴り倒されるのを見ながら、それでも髭面は余裕の姿勢を崩さない。奮戦する横顔に疑念を宿すエミリアに、髭面は口笛を吹いた。

「いいね、そそ。——不安と疑問がいい塩梅に心をこねてるみたいだぜ」

「ちよつと何言ってるのかわかんないわ、あなた」

「そうかい。なら俺の余裕の答え合わせをさせてやるよ」

首をひねるエミリアに見せつけるように、髭面が荷車に積まれた鉄の檻を叩く。そのまま彼は檻を叩いた手を口元に運んで——、

「——この檻、お前を入れるためって目的にしちゃでかくないか？」

「——」

その発言の意図を理解する前に、髭面が甲高い指笛を吹いていた。

森に木霊する高音が冴えた空気を切り裂き、雪道の傍に伏せられていた存在——檻に入られていた、巨大なモノを呼び寄せる。

「まさか……」

すぐ近くに発生した獐猛な気配に、エミリアは空を仰いだ。そのエミリアの頭上、隠す

気のない暴威——黒い影が悠々と飛び越える。

雪の地面を蹴り、大きく跳躍した巨躯が『うっかり雪道』に激しく雪煙を立てた。頭を下げ、牙を剥く漆黒のケダモノがエミリアを睨み、咆哮する。

「——ツツツ！」

涎を滴らせ、人の頭ほどもある犬歯をぬらぬらと光らせるのは双頭の獣——否、獣ではない。犬に似た二つの首は、その額に半ばで折れた角を備えていた。

「俺の余裕の答えだ。——魔獣オルトロス、どう手懐ける？」

魔獣を従える髭面が、戦慄するエミリアに向かって興奮した声でそう告げた。

6

髭面の自信の源、オルトロスは犬の双頭を持った巨大な怪物だ。

漆黒の毛で覆われた体躯は四メートルほどもあり、二つの頭は正気を逸した目でエミリアを睥睨する。その牙は彼女の細身なら一息で食い千切り、鉤爪のような鋭い前足も撫でるだけで人間を惨殺するだろう。

その殺戮に特化した姿形こそ、オルトロスが『魔獣』たる所以といえる。

「魔獣なんて……どうしてそんな馬鹿なことを！」

「男を馬鹿にさせるぐらい、お前が魅力的ってことだよ。罪なもんだなあ、ああ？」

優位に立った自覚から、髭面は切迫した表情のエミリアを嘲笑う。その戯言は内容こそパックの軽口に近いが、与えられる感慨は正反對だ。

ただ一瞬、この場にはいない小猫の精霊が思い出され、エミリアは息を呑む。

「——エミリア。ボクは一緒にいられないけど、危ないことはしちやダメだよ」

それは今朝の別れ際、パックがエミリアに残した忠告だ。

普段はとぼけた精霊の、真摯に語りかける言葉。そしておそらく現状は、パックに指摘された「危ないこと」に違いない。

何か問題があれば逃げる、とも言われた。パックが正しい。それはわかっている。

「でも、逃げたら……ダメ」

しかし、エミリアの足は逃げる方に動かなかった。逃げたくないのではない。ただ、ここで逃げれば村は、『庭』はどっちなる。

引き下がることなど、できるはずがない。

「おいおい、さっきまでの威勢はどうした？」

押し黙り、踏み止まったエミリアに髭面が手を打つ。その言葉にエミリアが顔を上げると、髭面は獠猛に唸るオルトロスを指差した。

「ビビッて無理ってんなら、オルトロスは引っ返めてやってもいいぜえ？」

「ホントに？」

「ここできよとんとすんのかよ。ああ、本当だ。どうせなら商品は無傷な方がありがたい。手足の足りないエルフじゃ価値が……」

「それなら魔獣を檻おりに戻して、あなたたちは森から出ていって。村にも、村人にも手出ししないこと。そうしてくれたら、仲直りしましょう」

髭面ひげめんの手打ちに乗じて、エミリアは円満解決のために意見した。他意のない、本気で真剣に考えたつもりの提案だ。

だが、それを聞いた髭面は呆気あつけに取られた顔をして、直後に怒りで顔を赤くした。

「状況が！ 見えてねえのか!? なんでお前が指示する立場なんだよ！ お前が言われる立場で、俺が言う立場だ！ 勘違いしてんじゃねえ!!」

「私は勘違いなんて——」

「オルトロス！ やれ！」

とっさの弁明は髭面の激昂げんきこうと、オルトロスの咆哮ほうこうに遮さへられた。

延々とお預け状態にあった魔獣は雄叫おんけいびを上げ、エミリアに飛びかかって前足を振るう。薙なぎ払う一撃が雪の大地を深々と抉えぐり、硬い雪ごと凍った土を吹き飛ばした。

その威力、まともに喰らえば人体など軽々とこそがれる。

銀髪をなびかせ、側転したエミリアはかろうじて獣けものの猛撃を躲かわした。しかし、喰らいつ

かんと迫る魔獣の猛追は止まらず、牙きばが連続してエミリアに追おい追すがる。

甲高い牙鳴り、生臭い獣の息、貪欲どんよくに飛び散る涎よだれ、それから必死に逃げ延びる。

「もう！ こんなこと、してる場合じゃ！ ないのに!!」

「——ッッ！」

双頭の繰り出す連撃に、エミリアは間一髪で対応し続ける。

間合いの取り方、連撃の繋つなげ方、いずれも魔獣と人間とでは勝手が違いすぎる。分厚い皮膚と体毛は打撃の衝撃も散らすため、迂闊うかつに反撃することもできない。

それに、警戒すべきは魔獣の牙だけではないのだ。

「殺すなよ！ 顔に当てるな、価値が下がる！」

エミリア目掛け弩弓どきゆうを構える部下に、髭面が居丈高いたけだかに命じる。

その声に従い、放たれる矢はエミリアの足——機動力を殺しにきた。飛来する矢と魔獣の牙、同時に襲おそいくる脅威おそびにエミリアは完全に余裕を失う。

体術を駆使して避け続けるが、いずれは限界がくるだろう。一撃が掠かすめれば、二撃目を直撃され、三撃目で確実に射止められる。そうなる前に形勢を——。

「——ふっ！」

強引に矢雨に体をねじ込み、射撃直後の無防備な二人を一撃する。駆け抜け様に別の男の腹はらに膝ひざを入れ、失念していた鋼板に跳ね返されて動きが止まった。

「しま——っ」

とっさに身をよじるも、オルトロスの牙に掠められる。裂傷は免れた。だが、ロープの裾を引っかけられ、体勢が大きく崩れる。そこに一斉に矢が降り注いだ。マズい、と思った直後にエミリアの体を影が覆った。

「——ツツ!!」

次の瞬間、苦痛の絶叫が上がる。しかし、それはエミリアのものではなく、双頭の獣が上げたものだ。魔獣の胴体、その背に無数の矢が突き立っている。

エミリアを狙った矢が、彼女に押し掛かろうとした魔獣の胴体を捉えたのだ。魔獣は猛然と振り返り、自分に攻撃を加えた一団へ前足を叩きつけた。

「——!?!」

壮絶な威力に雪面が弾け、雪煙の中に鮮血が混じる。

一撃を浴びた男たちは厚着が幸いして致命傷ではない。が、戦いを続けられるほど軽い傷でもない。同士討ち、その光景にさしもの髭面も怒りを爆発させる。

「てめえ、ふざけるな! 角折られて、誰がご主人様かわかってねえのか!?!」

「——ツツ!」

罵声に押さえつけられ、オルトロスは轟然と吠えて反発する。しかし、髭面の命令の強制力は魔獣の本能を凌駕していた。その理由は一つ、魔獣の角だ。

本来、決して手懐けることのできないとされている魔獣だが、唯一、その行動を支配する方法がある。それが、全ての魔獣が持つて生まれる角、それを折ることだ。

角を折られた場合に限り、魔獣は角を折った相手の命令に従うようになる。それ以外、魔獣を従わせる術はない。ただし、それも角を折った張本人だけの特権だ。

だからオルトロスは、髭面以外の男たちには牙も向ける。獲物と大差ないからだ。

「反抗的な目えしてるんじゃないやねえ! 今、お前がすべきことをさっさとやれ! あのエルフの足に噛みつけ! 動けなくして、俺の前に差し出すんだよ!」

「——ツツ!」

「とつととやれ!」

その上、角を折った折られたの関係であっても、魔獣との間に信頼関係が結ばれることはない。あくまで強制的な命令権、それだけで結ばれた関係だ。

故に、オルトロスの憎悪はエミリアと髭面区別なく注がれている。

「——」

それでも、オルトロスは髭面の命令に従ってエミリアの方へと身構えた。

憎悪と殺意は満遍なく抱いているが、主人へ向ける怒りも全て牙に込め、エミリアに突き刺して発散とするつもりだ。だが——、

「ねえ! もうやめにしましょう!」

そのオルトロスがけしかけられる直前、エミリアは髭面(ひげづら)に再び訴えた。

最後の説得の機会、この瞬間を逃せばあとはない。エミリアは必死に訴えかける。

「あなたの仲間も半分まで減ったし、ケガした人は治療しないと危ない！ あなたの本気はわかったからもうやめましょう。これ以上は取り返しがつかなくなるわ！」

「何度も言わせるな！ とつくにこっちは取り返しがつかないんだよ！ お前ってエルフを連れ帰って、ようやく取り返しがつくんだ！ そのための今だ！」

「命が惜しくないの!? すぐにここから逃げなきゃダメなの！」

「ああ……!?!」

互いに怒鳴り合い、しかし決死の呼びかけにようやく髭面は疑念を抱いた顔をする。

エミリアの訴えに込められた感情、それは恐怖とはまた異なるものだ。その切迫した感情が伝わった気配に、エミリアは言い聞かせるように続ける。

「前にも言ったでしょう？ ここは危ない森なの！ 特にあなた、前にここでたくさん血を流したから、きつと臭い(にお)を覚えられている。おまけに魔獣まで連れてきて……余所(よそ)の魔獣に縄張りを荒らされて、主はどうすると思うの!?!」

「縄張り？ 主？ 何を言ってるやがる！ ここが何の縄張りだってんだ！」

「それは——」

エミリアの言葉を無視してはならないと気付いたのか、髭面が声を上げる。その問いか

けに答えようとエミリアは口を開いた。しかし、遅い。

エミリアの返答より先に、『答え』の方が早くこの場に降り注いだ。

「——あ」

誰かが啞然(あき)とした声を漏らし、それにつられてエミリアは振り返って、空を見る。

頭上、丘の上からこちらに投じられるのは、空を埋め尽くすほど巨大な雪玉だ。

「逃げて——!!」

とつさに叫んで、エミリアは身を横手に投じ、雪玉の被害範囲から逃れる。

しかし次の瞬間には膨大な質量(ぼうたなしつりょう)が大地を揺るがし、いくつもの断末魔が響き渡った。

7

それは雪玉などと呼ぶには、あまりにも可愛(かわい)げと無縁の破壊をもたらしていった。

丸く巨大な質量は雪の坂を転がり、積雪を剥(は)がして我が身に蓄(たくわ)えながら総量を増し、純然たる破壊となって雪道を縦断、逃げ遅れた全てをひき潰(つぶ)す。

着弾地点にいたエミリアは逃れ、オルトロスも本能的に飛びずさって避けた。だが、回避行動を取れたのはそこまでで、以降の生死は完全に運に委(た)ねられる。

雪玉が転がる地点にいなければ幸運、いたなら不運、それだけの両極の結果だ。

「欠片なら脆く美しい雪の結晶も、雪塊と呼ぶべき質量になればただの凶器。進路上に取り残された男たちは雪に吞まれ、白雪に真つ赤な血の華を盛大に咲かせた。全身の骨が砕け、内臓を押し出される不細工な断末魔が重なる。雪道はほんの瞬きの間に惨状と化し、絶望的な死が雪景色に描き出されていた。」

その勢いのまま、男たちを巻き込んだ雪玉は彼らが運んできた荷車に激突、鋼鉄の檻を盛大にひしゃげさせ、そこでバラバラに砕け散った。散らばる雪の破片には吞まれた人体の一部と、以前、男たちが置き去りにした荷車の残骸が紛れていた。

男たちの置き忘れた道具を使い、男たちに死を与える。——それはまさしく、縄張りの主の怒りの体現、丘の上に立つ巨大な白影のやり方だ。

「雪荒らし……」

惨劇から目を逸らし、丘の上に立つ存在を見上げてエミリアはその名を呼んだ。

その呼びかけが聞こえたわけではあるまい。しかし、白影はエミリアの声に我が意を得たかのように空を仰ぎ、短い牙の並んだ口で雄叫びを上げる。

「アオオオオ——!!」

額の角で天を突き、白影は分厚い胸を両腕で叩いて己の存在を力強く誇示する。

奴こそが雪荒らし——大森林北部の『主』にして、残酷で狡猾な性質を持った魔獣だ。

雪を纏ったような縮れて短い白い体毛、酒ではなく殺意に酔った赤ら顔に、黄色の瞳が常軌を逸した害意と殺意に濡れて光り輝いている魔猿。

短い足の脚力は大地を踏み割り、大木のような両腕は数百キロの雪玉を軽々と投げつける。オルトロスより体軀こそ小さいが、その脅威は決して劣らない。

この雪荒らしの参戦こそが、エミリアが最も恐れていた事態、最悪の展開だ。

ただし、無粋な乱入者に憤激したのは、エミリアだけではなかった。

「——ツツツ!!」

坂下を威嚇する雪荒らしの姿に、オルトロスが負けじと毛を逆立てて吠え猛る。

二体の魔獣は同時に互いを敵とみなし、同時に互いを最大の脅威とみなした。

故に、直後の行動は必然にして、止めようのない激突だ。

殺意をぶつけ合い、二体の魔獣は数十メートルの距離を一挙に詰めた。

丘の上の雪荒らしへ、オルトロスは四肢を喰らせて坂を駆け上がる。鋭い牙を備えた強靱な顎が二つ、喰らいつけば十分に雪荒らしを仕留める必殺に足る。

疾走する双頭の魔犬に対し、雪荒らしもまた自ら接近戦を仕掛ける。しかし、生来の牙を持ったオルトロスと違い、魔猿の攻防は全く異次元のものだ。

駆け出す瞬間、雪荒らしは自身の掌を足下に突き刺し、その状態で前進する。すると、魔猿の巨大な掌は雪掻きの要領で雪面を剥がし、凄まじい勢いで雪を蓄え始めた。——やがて、集まる雪は魔獣の手の中で丸くなり、巨大な雪玉となって坂を転がり出す。それこそが雪荒らしの名前の由来、積雪を身勝手に荒らし回る暴威、その顕現だ。

「——ッッ!!」

雪玉の形成と、肥大化する速度と勢いは尋常ではない。

眼前に迫る白い凶器に対して、オルトロスはなおも果断に突貫する。双頭はそれぞれ限界まで顎を開き、雪玉を噛み砕いてその向こうの喉笛を噛み千切る構えだ。

両者の距離が近付き、接近し、至近になり、ゼロとなる。

牙が回転する雪玉の表面に突き刺さり、顎に力が入った。雪玉がその威力に——、

「オオオオン——!!」

森の主の両腕が膨れ上がり、雪玉の崩壊が強引にせき止められた。

その瞬間、雪玉に突き刺さる牙が根本でへし折れ、二つの魔犬の首は左右に弾かれるように頸骨を粉碎された。

問答無用の即死——巨軀は雪玉に押し潰され、碎かれる二つの頭蓋が血と脳漿をぶちまける。魔犬はそのまま雪玉の回転に吞まれ、哀れ亡骸は雪塊の一部となって雪道を転がり転がり、全身の骨を余すところなく折り砕かれて肉塊へ変じられた。

そのまま、魔犬をくわえ込んだ雪玉は坂を外れ、森に突っ込んで木々を薙ぎ倒しながら彼方へ消える。その圧倒的な力を見届け、魔獣以外のそれぞれの反応は分かれた。

「——」

エミリアは身構え、髭面はへたり込み、部下たちも呆然自失で動かない。

戦意が残ったのはエミリアだけだ。髭面たちは森の主の出現と、自分たちの切り札であったオルトロスの無残な死に完全に心を折られている。

「だから何度も言ったのに……!!」

悔し紛れにエミリアはこぼすが、愚痴に窮状が打破されたことは人類史で一度もない。

魔犬を圧倒した雪荒らしは、次なる獲物である矮小な人間たちを品定めする。森の主が優先するのは、戦う気概の残った存在——つまり、エミリアだけだ。

「——」

エミリアを見下ろし、睥睨する雪荒らしの足下、雪の大地には轍のような痕跡がある。地面をすり足の要領で移動する彼の魔獣は、縄張りはこの轍を残すのだ。大森林の地図の各所に×印を付けたのは、いずれもこの雪荒らしの狩場。

それはここも例外ではない。魔獣はエミリア目掛け、大口を開けて咆哮する。

「アオオオオ——!!」

「——ふっ!」